鹿児島国際大学社会福祉学会誌

ゆうかり

第19号

鹿児島国際大学社会福祉学会編集

第 19 号をお届けします―ポポラスは元気です！

オーストラリアでは大規模な森林火災によって莫大な数の生き物（植物も含めて）の命が奪われてしまいました。本当に悲しいことです。コアラも大変な被害を受けたと聞いています。また、コアラの主食であるユーカリ樹もその大部分が消失してしまったことでしょう（合掌）。

けれども、命は繋がれてゆくものです。きっと近い将来、絶滅を免れた固有種たちが再びその花を咲かせる日が来るものと信じてやみません。

本学の学校樹であるユーカリ樹は、もとをたどればオーストラリアから移植されてきたものです。「固有種の命」という点からすると、ユーカリの命は、異国の地日本でもその花を咲かせ、脈々と受け継がれてきているのです。コアラたちも本学の近くにある「平川動物園」でその命を繋いでいます。きっと本国のコアラたちに無言のエールを送っていることでしょう。

さて、ユーカリ樹から命名された学会誌『ゆうかり』、そして、コアラから発想した『ゆうかり』のマスコットキャラクター・「ポポラス」ちゃんも、再び第 19 号の新たな意匠のなかで、元気にその命を繋いできております。さらにいえば、昨年学会で購入したポポラスの樹も元気に成長しております。

ところで、福祉に携わる仕事（福祉職）という「固有種（職）の命（社会的生命）」はしっかりと繋がってきているでしょうか？　その命は果たしてイキイキと輝いているでしょうか？

福祉職の根幹にある精神のひとつは、「ケア」であると思います。そして「ケア」とは、「その人のために、その人の側に寄り添い、自分の大切な時間を与える」ということに尽きます。かつて家族内であたりまえに行われていた老親の「ケア」のことを考えてみてください。この場合のケアには、自分の時間を老親の介護に費やすことに対する対価や報酬はありません。それは、家族代々にわたって繰り返されてきた無償の行為であり、贈与交換の枠からはみ出した「純粋な贈与」なのです。

今日、こうした純粋な贈与は時代遅れのものとなりました。あるいは危険なものと考えられています。「ケア」は専門職としての「介護職」等へと集中し、純粋な贈与は、「やりがい搾取」や「ブラックな労働」としてみなされることがほとんどです。

けれども、純粋な贈与には「有用性」という限界を突破する契機が含まれています。2016 年に起きた「津久井やまゆり園」での大量殺人事件は、知的障害をもつ人々を無用なものとして差別し殺戮した元施設職員 A による凶行でした。A にとっては、自分の行う介護に対して感謝や反応のない障害者は、無用な存在であり、社会にとって邪魔な存在に他ならなかったのです。彼は、有用性の枠の中でしか人間を理解できない人間でした。福祉に携わる人には、そうした有用性の枠を突破できる哲学やマインドが必要とされるはずです。そうした突破力は必ずや福祉の仕事をもっとイキイキとしたものへと変えてくれるはずです。

少し難しい話になってしまいました。けれども福祉の学びとは、つまるところ、より良く生きるための人間観・社会観を鍛えるということになるのではないでしょうか。そして、福祉職とは、人間や社会に対して優れた観察眼と洞察力、さらには実践力を備えた専門職であると考えてよいでしょう。

みなさんも、他者に対して真摯に寄り添い、人と社会とは何かを考え続ける福祉の海原にポポラスとともに元気に漕ぎ出してみようではありませんか！　（M）

目　次

巻 頭 言　令和最初の「ゆうかり」は人生の指南書となるか
社会福祉学会会長　松元 泰英 …… 1

社会福祉学科企画行事　「一日大学生体験」　岩崎 房子 …… 2

社会福祉学会講演会報告　まちを● LIVE する ― 斉場俊之氏講演会 ―
茶屋道 拓哉 …… 5
菅原 優菜　大村 隆就　神田 雄飛
髙橋 あい　溝口 昌歩

ゆく人、来る人 ―さよならと、こんにちは …… 10
この度，社会福祉学科を卒業します　蓑毛 良助
鱒渕さんとの思い出　古村　溝
新任教員の挨拶　有村 玲香
リスタート、鹿児島　茶屋道 拓哉

ゆうかり編集委員会企画 ～学生による3つのコラム～
迷走的突発レポート　有園 菜央・佐々木 晶 …… 17
箱根駅伝グラフィティ　一氏 未奈 …… 20
【書評】有川ひろ『レインツリーの国』　草野 春香 …… 23

社会福祉学科イベント
新入生歓迎行事　古賀 政文 …… 26
ソーシャルワーク実習 …… 27
精神保健福祉援助実習について　岡田 洋一 …… 31
介護実習　岩崎 房子 …… 33
教育実習　古賀 政文 …… 35
新入生ゼミⅡ「福祉施設見学研修」 …… 38

演習論文報告会コメント　上田 雪子・岡田 洋一 …… 43

自主研究助成による研究報告
討論型世論調査（Deliberative Poll）に対する一般的な認識と新聞動向の調査
唐　玉 …… 45

２０１９年度演習論文テーマ …… 47
鹿児島国際大学社会福祉学会会則 …… 51
2018 年度鹿児島国際大学社会福祉学会・収支決算報告 …… 53

ゆうかり編集室便り …… 54

◇表紙写真撮影：佐々木晶さん

□撮影協力：学内カフェレストラン「ピーチピット」

巻 頭 言

令和最初の「ゆうかり」は人生の指南書となるか

社会福祉学会会長　松元　泰英

ここに令和最初の「ゆうかり」第 19 号が完成しました。最初に、この「ゆうかり」を手に取ることになるのは、今年度の卒業生になるでしょう。おそらく、福祉職だけでなく、一般企業、公務員、教員など様々な職種に就職されると思います。働くにあたって、もしかすると、心配や不安がある人がいるのではないでしょうか。仕事内容が自分に合っているのか、先輩や同僚とうまくやっていけるかなど、不安は尽きないかもしれません。しかし、実際に社会に飛び込むと、苦しいことよりも楽しいことややりがいなどを発見できると思います。もし、あまりにも、大きな壁に突き当たったら、大学の先生などを訪ね思い切り悩みを相談するか、この学会誌の「ゆうかり」を読み返すと解決の糸口が見つかるかもしれません。

在学生の皆さんが、この「ゆうかり」を手に取るのは、おそらく新年度が始まってからになると思います。大学生活はもちろん勉学第一ですが、それと共に人生経験がとても大切です。大学生活は、自由に様々な経験ができる期間であり、また場所にもなります。何事もやるかどうかで迷った場合には、おそらく体験してみることが今後の人生のためになるはずです。たとえ思ったような結果が出なくても、それは人生の貴重な経験としてあなたの糧になるでしょう。何事にも挑戦できる大学時代を有意義に過ごしてください。

新入生は、今までとは違った生活を大学では送っていることと思います。高校までは、自分の前にはレールが敷かれていました。そのレールから脱線しないように、一生懸命走れば問題なかったと思います。しかし、大学では、自分でそのレールを敷く作業から始まり、その作業は今後の皆さんにとって、重要な作業になるはずです。この作業が最初からうまくいく人は稀有に等しいと思います。何度もレールを敷きなおすことで、自分に最適なレールが敷かれていくのです。

私が、大学を卒業する頃、今のような社会はとても想像できませんでした。例えば、中学生男子のなりたい職種第 1 位は、「You Tuber などの動画投稿者」、ゲーム開発会社がプロ野球球団を保有するなど全く予想外の出来事です。おそらく、今の大学生や卒業生にとっても、同様なことが起こるでしょう。つまり、激しい時代の変化に、私たち自身が柔軟に対応できる資質を持つことが必要になります。文部科学省（当時の文部省）が 1996 年に述べた「生きる力」とは、まさにこの「変化の激しいこれからの社会での生きる力」を指しています。卒業生や在校生の皆さん、是非このことを考えながら、社会生活や大学生活を過ごしてください。

今回の「ゆうかり」も、前回同様、とても読者にとってやさしく構成されています。余白には鹿児島国際大学の「シンボル樹」である「ゆうかり樹」の一品種の「ポポラス樹」のマスコットキャラクターである「ポポラス」を載せてあり、これも、この学会誌をつい手に取ってしまう一つの要因でしょう。是非、卒業生及び在校生、新入生の皆さん、人生の指南書として、この「ゆうかり」を愛読してください。

第 19 号「ゆうかり」の編集に中心的に関わられた村上先生や編集委員の学生の皆さん、また執筆者の方々、誠にありがとうございました。

社会福祉学科企画行事

「一日大学生体験」

岩崎　房子

2019 年 11 月 4 日（月）「文化の日」の振替休日に第 2 回社会福祉学科企画行事「一日大学生体験」が行われました。本企画は、大学の平常授業日に実施し、中高校生に鹿児島国際大学のキャンパスライフや社会福祉学科の授業体験、大学生との交流をとおして「大学生」や「社会福祉学科」のイメージを描いてもらうこと、また、「福祉」に対する興味・関心を持ってもらうことを目的に昨年度よりスタートした学科独自の取り組みです。

さて今回は、「福祉の現場を体験しよう！」というテーマを掲げ、学生主導で行われました。今年度は、昨年度を上回る参加（高校生 38 名、保護者 8 名、計 46 名）があり、好評企画として定着しつつあります。当日のプログラムとその内容を以下に紹介したいと思います。

【プログラム】

9：30 ～ 9：50	受付
9：50～10：00	学科長あいさつ・学生代表あいさつ
10：00～11：00	中高生と大学生のグルーピング＆自己紹介・ミーティング ・キャンパス探検！ ・学科の授業をのぞいてみよう…後期月曜日の 1 限目の授業
11：00～12：00	授業体験！ ①テーマ「社会福祉って何？」（講義形式：大山先生） ②テーマ「福祉のお仕事」　（演習形式：山下先生）
12：00～13：00	昼食…中高生＆保護者＆大学生　一緒にピーチピットで食事 昼食後にキャンパス探検
13：00～13：40	大学生活プレゼン（各 4 ～ 5 分程度） 【福祉の醍醐味！実習編】 ① 精神保健福祉実習体験談・・・・4 年：小屋敷実友さん ② 教育実習体験談・・・・・・・・4 年：菅　健輝くん ③ ソーシャルワーク実習体験談・・4 年：松本　啓汰くん 【大学内外での活動編】 ① フィールドワーク参加・・・・・3 年：神保　哲汰くん ② 学友会活動・・・・・・・・・・4 年：鮫島　隆静くん ③ 学業とアルバイトの両立・・・・4 年：黒木　大雅くん ④ 大学生生活の楽しみ方・・・・・4 年：竹宮　智子さん
13：50～15：00	福祉の現場を知ろう！ ・ニコニコタウン喜入　・アルテンハイム加世田 ・鹿児島県社会福祉士会　・鹿児島県精神保健福祉士協会 ・鹿児島県医療シャルワーカー協会
15：00～15：30	クッキータイム…お茶を飲みながら高校生・保護者の方々、大学生、福祉の現場の方々との意見交換会
15：30～15：45	集合写真撮影、アンケート記入、学生代表あいさつ・学科長あいさつ 終　了

イベント司会の２人のツーショット！
緊張しながらも頑張ってくれました。

キャンパス探検！では、松元学科長が椅子に座ったまま入浴できる最新式の機械浴の説明を自らモデルになって行ってくださいました。高校生の皆さんは、興味津々ながらも、笑いをこらえるのに必死でした。

お昼は、高校生・保護者の方々と大学生が一緒に**ピーチピットでランチ！**おいしくて話も弾み、最高でした。

大学生活プレゼンは、高校生・保護者の方々が真剣に聞いてくださいました。高校生の感想「大学生活を詳しく知ることができた!!」、保護者の方々の感想「すばらしかった。学生さんの笑顔もよかった」、「大変参考になりました」と好評でした。

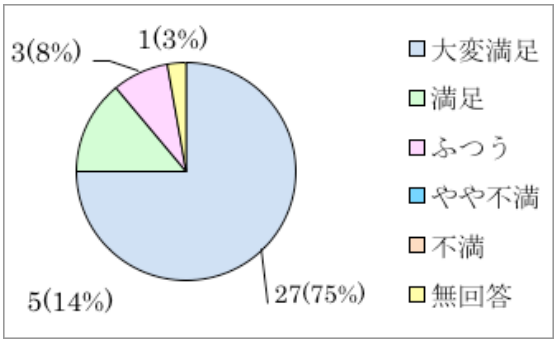
福祉の現場を知ろう！は、３つの社会福祉職能団体の方々、２ヵ所の高齢者施設の現場の方々が協力してくださいました。介護の現場は、介護予防器機や介護ロボットをはじめ、IT 化が進んでいました。また、福祉職能団体の方々とのミーティングでは、福祉の仕事は幅が広いということを学ぶ機会になったようです。

クッキータイムでは、お菓子を食べながら、高校生・保護者の方々、大学生、福祉の現場の方々が一緒になって大学生活や福祉の仕事についての話をしました。“いろんな話ができて、心配事が減った”との感想がありました。

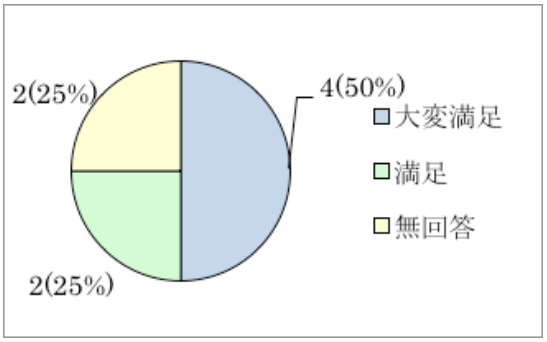
「一日大学生体験」のアンケート結果

以下は、本企画の「全体の満足度」アンケート結果です。高校生の 89%、保護者の 75%が満足したと答えています。

高校生



保護者



高校生の意見は、「大学について知ることができた」「大学生活についても聞けたので良かった」「学科のことをたくさん知れた」「実際に福祉の現場の方々から講話をして頂け、知識が増えた」という意見が多く聞かれました。大学生活や社会福祉学科、そして福祉の現場への理解が深まったようです。その他にも、「学生さんたちが優しく、全体的に面白かった」「学生の方たちも先生方も私たちのことをたくさん考えて楽しませてくださったので、自分たちも気軽に話せて楽しかったです」など、“社会福祉学科の売り”である“学生のコミュニケーション能力の高さ”を反映する意見も聞かれました。

次に、**保護者の方々の意見**は、「一日で、大学生活や親が一番気になるアルバイトとの両立など大学生の本音が聞けた。資格をとる、そして、その後の仕事へのつながりをとても分かりやすく説明してもらい良かった」「学生さんが一生懸命に対応してくださり、とても好感が持てました」との意見が多く聞かれました。なかには、「子どもに福祉に興味を持ってほしくて、一緒に参加しました」という貴重な意見もありました。

今後に向けて

学科企画「一日大学生体験」の開催は、今回で２回目。前回は、社会福祉学科と大学生活を知ってもらうことを前面に押し出しましたが、今回は、前回の内容に加え、“福祉の現場（福祉のしごと）”を身近に感じてもらえるよう企画を検討しました。参加された方々は、進化し続ける福祉現場の様子、福祉の奥深さや幅広さに触れ、福祉をより身近に感じられたのではないでしょうか。この企画をとおして、多くのみなさんに“福祉”を知ってもらう意義は大きいと思います。来年度も、“オール社会福祉学科”で学生と教員が一緒に取り組んでいきたいと思います。

社会福祉学会講演会報告

まちを● LIVE する ― 斉場俊之氏講演会 ―

茶屋道　拓哉

「斉場さんはソーシャルワーカーなんだな」

初めて斉場俊之氏に出会って、頂いた名刺には「ソーシャルワーカー」や「○○福祉士」なんて肩書はない。でも、話をする中で、そんな感覚を持たせてくれた。そして、現代の「ソーシャルワーカーと呼ばれる人たちに足りない何か」を埋めてくれるパズルのピースを見つけた感覚を持った。前任校の九州看護福祉大学在職時に出会い、その時から「いつかこの人の話を若い世代に聴かせたい」と思っていた。そんな漠然とした思いは、「斉場先輩」と私の母校、鹿児島国際大学で実現した。

2019 年 12 月 21 日、100 名近い学生と教員、そして社会人の方をお迎えして「**まちを● LIVE する～「好き」からはじめる地域づくりと災害支援～**」と題した斉場俊之氏の講演会は始まった。私から斉場氏にお願いした内容は次の 3 点。1 点目は斉場氏のキャリア（今の仕事とこれまでのキャリアがどのようにつながっているのか)、2 点目は熊本地震をはじめ、数々の災害時に斉場氏が取り組んできたこと、そして 3 点目は、斉場氏自身のものの見方や考え方､行動が｢ソーシャルワーク感覚｣を内包していることを表現して欲しい。であった。

さて、学生たちに斉場氏と私の思い（狙い）は届いただろうか？狭いフレームの福祉や対象ありきのソーシャルワークに固執しないよう、視野を広げられただろうか？参加してくれた学生達の感想を頼りに、振り返ってみることにしたい。

講演終了後、斉場氏とゼミ教員であった高橋信行先生、鹿児島県社協の職員と懇談しながら「新しいカタチのソーシャルワーク」について語ることができたのも有意義な時間であった。

◇斉場さんのお話を聴いて（講演全体のまとめ）

社会福祉学科 1 年　菅原　優菜

斉場さんは、1996 年に鹿児島経済大学（後の鹿児島国際大学）を卒業後、ソーシャルワーカー（以下:SW）として 1996 年から約 4 年間､福岡県の在宅介護支援センターで働いた。そのあと、2000 年に久留米市の社会福祉協議会（以下：社協）に転職、そして 2006 年に故郷である熊本県社協に転勤し、今の仕事につながる地域に拠点を置いた仕事を開始した。

もともと斉場さんは父親の仕事の関係で転勤族であったため、地域のコミュニティを知らずに育ったそうだ。そのため、どのようにして地域と関わるべきなのか戸惑うことも多かったようだ。しかし、SW として働いているうちに、その地域の多くの方が話しかけてくれるようになりコミュニティの楽しさを知ったとおしゃっていた。久留米市社協での斉場さんの活動は、孤独死を防ぐためにお年寄りたちが交流する場を設けることだった。そのため、地域の人の中では福祉の人というイメージが確立していたそうだ。もちろん熊本県社協でも、ボランティアセンターで働き、SW として仕事を行ってきた。

斉場俊之さん

2008 年斉場さんにとって今の活動につながる衝撃の出会いが訪れる。それは､今では当たり前に利用されている SNS との出会いである。時、場所を簡単に超えることができ、どんな人でも平等に使うことが

できるため「やりたいこと」で簡単に集うことができる素晴らしいもの。その当時、斉場さんは「すごい時代がやってきた」と思ったそうだ。そして斉場さんはその機能を活用して、「Twitrain」という活動を開始した。LIVE 配信機能を使い、路面電車を活用しながら熊本の良いところを広めようという活動である。それを続けていくうちに、地域内での斉場さんに対する認識が福祉の人からライブ配信の人に変化していき、それに伴うかのように斉場さん自身のやりたいことも変化していった。私は、時代が変わると仕事の内容も変わるということを、この話を通して実感することができた。

2013 年、17 年間携わってきた福祉の仕事を離れ、自身で「さいばーとれいん」という事業を立ち上げた。メディアディレクターとして働き始めた斉場さん。その事業での主な仕事は、映像制作や、ライブ配信、Web 制作等である。これらの仕事には共通した目的がある。それは、自身が熊本の伝統的な活動や、頑張っている人を取り上げることで地域の中での「がんばる」や「キラキラ」を伝えることだ。私は社協をやめてもなお、斉場さんが地域の人を対象とする仕事に携わっていることに驚いた。

そして今、斉場さんは災害ボランティア活動支援プロジェクトメンバーの一員としても活躍されている。そこでは、社協に勤めていた時の福島でのボランティア経験と、2016 年に起こった熊本地震の災害経験を生かして、交通手段がない為にボランティアを行うことができない人を減らすために、ボランティアバスなどの情報を Web に記載する取り組みを行っている。そんな多方面で活躍する斉場さんの仕事論には、仕事は「課題解決」、商談は「個別支援」という SW の考え方が組み込まれている。お客さんが何を求めているのか本当のニーズを見ることを大切にしている斉場さん。私は、福祉を離れても福祉の考え方を大切にする仕事の仕方に驚いた。これも、形は異なっているがソーシャルワークなのだろうなと思い、独自の形で地域と携わる面白さを知った。私の得意分野で福祉にかかわることはできるだろうかと考えたため、いつもと違った方向から福祉を考える良い機会になった。また、仕事を行う上で、個人経営であっても協力は必要であるとおしゃっていたので、今あるつながりを大切にしたいと改めて思った。

◇ SNS の持つ可能性～「好き」からはじめる地域づくり～

社会福祉学科 1 年　大村　隆就

講演会の中で SNS の話があった。トランプ大統領だろうと自分だろうと伝えられる文字数は全ての人々が平等であると気づかされた。SNS 上では全員が平等にあるとあり、自分はただ呟いているだけだが、視点を少し変えるだけでいろいろな視点があると感じた。また、リアルで繋がる事の難しい芸能人や有名人とも繋がれるのが SNS であり、SNS で知り合った人とリアルで会えるというメリットがあると語られた。しかし、SNS 上とリアルでは性別を偽っていたり SNS では強めに物事をとらえていたりしてもリアルでは控えめであったりと SNS とリアルでは違ってくるため SNS で繋がる際は気をつける必要がある。

斉場さんの講話の中で「くまもとサプライズ」というイベントや熊本電鉄の話があった。その中でライブ配信の話があり、もともと Twitter で誰かライブ配信で熊本を配信してみないかと呟いたところ「斉場さんがやってみたら」と返信があり、斉場さんが好きな「熊本電鉄」と「ライブ配信」を組み合わせたのが始まりだった。当時は 5G、4G はおろか 3 G 回線の世界であった。

配信をすることで色々と出来ることが増えてきた。ライブ配信で福祉の事を取り上げて社協の事を多くの人に伝えるようになった。自分の好きなことと SNS やライブ配信を繋げることで様々に出来ることが増え、様々な人たちと繋がることができると感じた。情報発信を行うことで多くの人に自分の考えが伝わり、またいろいろな視点を得ることができるのだと感じた。

斉場さんの話を聞いて地域に出向いて福祉を伝えたり、ボランティアを通して福祉を伝えるだけではなく、SNS や、ライブを活用して福祉を伝えたり、地域を興したりすることができると感じた。自分が好きなことで福祉を伝えることができると知り、自分自身も好きなことで福祉を伝えていきたいと思った。

◇人や物の強みを生かす～「好き」からはじめる仕事づくり～

社会福祉学科２年　神田　雄飛

私は、講演会の「まちを● LIVE する」というタイトルを見て、まちを生放送することがどのように福祉と関連するのだろうかと疑問に思いました。斉場さんが SNS に興味を持った理由はリアルでは作れない人間関係だけでなく、リアルの人間関係も広がるからです。また、SNS はどんな人も平等であり誰かが評価するのではなくみんなが評価するため小さい意見も聞くことができると SNS の影響力について語りました。

斉場さんはライブ配信など面白いものがあると知り、自身も何かやってみたいと思い一万円で電車を借りてインターネットライブ配信する企画を熊本で実践しています。この企画のアイディアだけで 1,291 名が視聴する全国放送になり、「熊本で何かやっている人がいる」と声がかかるようになっていきます。出来ることが増えたのを機に、地域の「がんばる」や「キラキラ」を伝えることができないだろうと考えはじめ、「さいばーとれいん」の事業を開始しました。地域と情報発信で町おこしをしていこうとしたが、初めは配信する人がいないため自分で企画し、街中で公開放送に取り組んだりもしました。その効果もあり仕事も増え、ライブ配信は 7 年間で 10 万人以上の方に視聴されています。

2016 年に熊本地震が起こり仕事が激減したものの、斉場さんは県内各所の災害ボランティアセンターへ出向き、情報発信のサポートを行いました。災害の記録と継承のためボランティア活動を行った人のインタビューや当時の写真を集めて DVD を制作したのです。

斉場さんの話を聴く前に SNS や情報配信は私にとって怖いというイメージがありました。全世界配信であることや自分が発信したことが受け取り手に誤った捉え方を与えてしまう可能性があるからです。しかし、裏を返せばそれだけ影響力があるので、それを利用すれば社会に何か変化を生み出すことができます。だから使い方次第だと思いました。斉場さんの仕事論では、「仕事は課題解決」で「商談は個別支援」と話されたことが印象に残りました。福祉の対人援助の行動規範であるバイステックの 7 原則に通じるものもありました。

福祉で学んだことは様々な職種に生かせると思います。幅広い視野を持っていろいろな角度から物事を考える力が必要であると講演を聴いて感じました。

◇斉場さんの災害支援活動～「助けて」と「助けたい」をつなげるために～

社会福祉学科１年　髙橋　あい

斉場さんは 2016 年、熊本地震を現地で経験した。益城町から北の 10km あたりに位置する、熊本県合志市で被災したという。一回目は震度 5 強、二回目は震度 6 強であり、家の中のあらゆるものが飛び上がるほどの揺れであったと語る。幸いにも家は無事で、物資も佐賀県にある実家から確保することが出来た。しかし、イベント等みんなが何かをしたいときに役立つ映像業は、生きていくことに精一杯になっている被災時、需要が無くなり仕事を失った。そのため、斉場さんは社会福祉協議会の設置する県内各地のボランティアセンターに出向き、インターネットに関する支援を行った。そのとき役に立ったのは 2011 年、被災地福島での経験であったという。

2011 年に東日本大震災が発生し、福島県は甚大な被害を受けた。いち早い復興が求められる中、福島県は問題を抱えていた。福島第一原子力発電所の事故により、放射線による人

体への被害が懸念され、福島県へのボランティアが集まらなかったのである。その問題を解決するため、当時社会福祉協議会の職員として福島へ災害支援に訪れていた斉場さんはホームページやSNSで呼びかけを始めた。当時としてはとても画期的な取り組みだったという。もう一つの問題として、ボランティアへの対応があげられた。ボランティアに参加したいという人からの問い合わせが後を絶たず、ボランティアセンターの職員が対応にかかりきりになってしまうのだ。こうなると職員が直接地域の声に耳を傾ける時間が減り、困りごとを把握できなくなる。つまり、ボランティアにつなぐ案件がないという悪循環に陥ってしまうのだ。そこで、斉場さんは特設ホームページを開設し、SNSで情報発信を始めた。ボランティアに関する多くの情報を掲載し、ボランティア対応をインターネットに任せ、問題を解決に導いたのだ。

福島や熊本での活動が契機となって、全国社会福祉協議会と共同募金会の作っている災害ボランティアプロジェクトに情報支援チームとして参加し、今に至る。最近では、台風19号や西日本豪雨にも情報発信という面から支援を行った。

私はまず、斉場さんの圧倒的な行動力に驚いた。斉場さんは2016年に熊本で被災したにも関わらず、自らが行えるアプローチの仕方で被災地支援を行った。実際に被災してしまうと今を生きることに精一杯になったり、被災のショックから気持ちが落ち込んでしまいそうなものである。事実、斉場さんも被災後の状況に衝撃を受け、なかなか現実を受け入れられなかったという。しかし、すぐに県内各地のボランティアセンターに出向き、支援を行った。その行動力の源には「人の役に立ちたい」「困っている人を助けたい」という強い福祉の精神が根付いているのだ。私も、斉場さんのように、どんな時であっても正しい知識と冷静な判断で支援が行える強い福祉の精神を持った支援者になりたいと思った。

また、斉場さんは台風19号での災害支援において、ボランティアバスの情報をまとめたホームページを開設した。このホームページの効果もあり、ボランティア参加者が増えてスムーズに支援が行えるようになった。そのほか、ボランティア対応のホームページやSNS、被災記録継承用ビデオ等、斉場さんは、福祉×情報という視点で支援を行ってこられた。この、「福祉×○○」という組み合わせ方は、私たちに無限な支援の方法を見せる。私も、福祉＝直接的対人援助という固定概念を破り、様々な方法で多面的に支援していきたい。そのためにも今回斉場さんから学んだ多くのことを忘れずに胸に刻みたいと思う。

◇「さいばの仕事論」で語られたことのまとめ

社会福祉学科１年　**溝口　昌歩**

斉場さんの講演会の後半「さいばの仕事論」で語られたことを次の３点にまとめてみた。

① 仕事は「課題解決」商談は「個別支援」

仕事はすべて一人でするのではなく規模に応じて仲間づくり・仕組みづくり・環境づくりをしてチームで臨む。福祉でいう「コミュニティーワーク」である。商談はお客様の欲しいもの探しで、福祉でいう「ケースワーク」である。

② 本当に求めているものを提供する

ライブ配信の依頼を受けた場合であってもまずはその方の目的にライブ配信が効果的なのか、ほかにもっと伝わりやすい方法は無いのか考える。お客様が本当に伝えたいものを伝わるもので広めるためにライブ配信だけでなく映像・web・紙媒体も扱う。紙媒体の広告であれば多くの人の目に止まり、タイトルだけを見て興味を持ち、開いてもらうことにこだわりを持っている。

③「福祉」×「○○」が新しい仕事を生む

福祉一家に生まれ今も福祉に囲まれているが、その中に自分が好きだったインター

ネットや映像、写真など掛け合わせて社会の役に立つことにつなげ、今の自分のやり方になった。それぞれの行政や施設にはそれぞれの役割がある。その中で自分のやりたいこと・考えを実現できるポジションで社会の役に立ってほしい。また、福祉のノウハウはビジネスに通じる。相手の立場という違う視点から見ることが出来るということは、とても強みになる。意識して、接し方をコントロール出来る。これらはビジネスを円滑に進める有効な手段になる。福祉の仕事に就かなくても大きな武器になる。福祉と自分の興味のあることを掛け合わせるとまだ誰も気づかなかったビジネスにつながるヒントになる。それらを研究していくことによって経済や地域に役立つ仕事になる可能性がある。自分の持っている楽しいこと・興味のあることを大切にしてほしい。

福祉の仕事に就かなくても、「福祉を学ぶことは自分にとっても武器になるという」言葉がとても印象に残った。クライエントが本当に必要としているもの、本当にしたいことを見つけ、一緒に方法を考えていくように、どの仕事に就いても相手がどう感じているか、何を目標としているかを見つけ、受け取ることは必要なのだと感じた。また、自分の興味のある事と福祉を掛け合わせることで新しい仕事を生むヒントになるという所も印象に残った。趣味などの普段福祉の勉強と別に考えている事も、掛け合わせることによって新しい考え方や方法、選択肢に変えていけるのだと思った。

今回の講演を通して、福祉についてもっと学びたいと感じた。仕事以外でも他者のことを考え、意識して接し方を変えられる人になりたいと思った。学生であるうちに様々なことに興味を持ち、経験していきたいと思う。

講演会当日の会場風景

ゆく人、来る人 －さよならと、こんにちは

時間が経過するたびに、新たな出会いと淋しい別れとが交錯する。

社会福祉学科では、蓑毛良助、綱川菊美、野田隆峰の三教授が令和２年３月 31 日をもって退職されることになった。また、中山慎吾教授が他大学にご栄転されるため本学を後にされる。

さらに、大変悲しいことに、昨年９月には、鱒渕祐一先生がご病気のために突然他界された（合掌）。

その一方では、あたらしい方々が本学科に赴任されて、いままさにご活躍中である。

ここでは、「ゆく人、来る人」と題して、去られる方々の代表として蓑毛良助教授に、学科在任中の貴重な思い出を語っていただくとともに、ご逝去なされた鱒渕先生との思い出を、交流の深かった児童学科の古村溝先生にお話しいただくことにした。

そして、あたらしく着任されてご活躍のフレッシュな方々、有村玲香、茶屋道拓哉の両先生には、本学科や鹿児島でのこれからの抱負について述べていただいた。

この度、社会福祉学科を卒業します
―36 年間のありがとうの思い出とともに―

蓑毛　良助

1983 年（昭和 58 年）４月、私は愛媛大学教育学部から本学に着任した。当時の私は 34 歳で、国立大学から初めての私立大学で不安もあったが、故郷で仕事ができる喜びがあった。

その当時の本学は、経済学部単科大学から社会学部創設で２学部体制になったばかりであった。私は、社会福祉学科創設２年目に着任したが、当時、コピー機は総務課に１台しかなく、研究室も共同（２人）から単独になったばかりであった。学部自治が認められ、国立大学と同じ印象を受けた。大学全体はのんびりしていて、２学部対抗の教員のソフトボール大会もあり、教職員組合も活発であった。

一方、できたばかりの社会福祉学科を盛り立てようと、学生・教員が一体となって取り組んだ。若手教員だった私は、福祉と教育を共に担当し、県内外の社会福祉施設・特別支援学校を実習と就職の依頼で訪問した。その後、福祉系教員の増員と資格の新設で、福祉担当者と教育担当者が分けられ、私は教育担当者になった。隣接の産業社会学科（後の現代社会学科）とも教員・学生ともに自由に交流していた。また、私は、学生募集で九州、中・四国の高校を訪問した。当時、九州の福祉系大学は本学と西九州大学のみであった。

その後、私は学生部長・教務部長となり、全国の会議に出席して、本学にも大学院の創設と留学生の受け入れを推進しなければならないと痛感し、学長に提言し、承諾を得て実現した。また、オーストラリア・シドニー大学に１年間留学させていただき感謝している。

１期生の学生たちは、先輩がいない中、ボランティアサークル「ふれあい」「ひまわり」を創設し、熱心に取り組んだ。阪神大震災では、神戸市長田区の復興ボランティアとして参加し、全国からのボランティアのリーダーとなり、長田区社会福祉協議会に就職する学生もいた。

１期生は、今56歳になっており、学生の時と同様、学校・施設や企業で活躍し、校長・施設長・社長となり社会貢献している。

第２次ベビーブームの頃は、本学科の競争率も高く、公立高校でオール５の学生でも不合格になることもあった。今も個人差はあるが、優秀な学生たちが活躍していることは、嬉しい限りである。

学生の中には、視・聴覚障害、肢体不自由のハンディを持つ学生たちもいたが、本人たちと家族の努力と大学の支援によって、優秀な成績を残した。また、社会人学生たちも、若い同級生たちを支え刺激を与え、優秀な成績を残した。

その後、大学院も新設され、私は修士20名・博士４名(中国からの留学生３名を含む)に学位を与えた。院生たちは施設・専門学校・短大・大学の教員となり活躍している。優秀な院生と共学ができ、私自身の研究も深めることになった。

また、児童相談センター長として、多くの子どもたちの療育に取り組んだ35年でもあった。卓球部の部長も35年務めた。卓球部は、九州でベスト３のレベルになった。

今年も、学生たちは県内外の学校・施設等に就職内定している。一人一人の学生を育てる努力をすれば、学生たちは確実に成長することを実感した。

今年度、若い先生たちが着任し、社会福祉学科に熱意をもって取り組んでいただき、新風をもたらし頼もしく感じている。今後も社会福祉学科が発展し、多くの分野で活躍する学生たちを輩出することを心から期待している。社会福祉学科での日々は、私の人生そのもののであり、満足している。今日まで多くの方々にご支援いただきましたことに、心から感謝申し上げます。36年間お世話になり誠にありがとうございました。

鱒渕さんとの思い出

古村　溝（福祉社会学部児童学科教員）

2019年9月1日、鱒渕祐一先生（社会福祉学科准教授）が御逝去されました。
謹んでご冥福をお祈りいたします。

鱒渕先生は社会福祉学科所属、現在、私は児童学科所属ということで異なる学科に所属していますが、以前私は社会福祉学科に所属しており、またお互いに共通教育の授業を主に担当する教員でもあることから、会議などで一緒になる機会が多かったように思います。いつのころからかはっきりしませんが、学部教授会では隣り合わせにいつも座るようになっていました。座席指定されている訳ではないのですが、鱒渕先生の右隣が私の座席となっていました。鱒渕先生が体調を壊され教授会を欠席されるようになってから、私の左隣の席は空席になってしまいましたが、今もそのまま続いています。その空席を見ると、もう聞くことのない、鱒渕先生のまったりとした丁寧な口調での教授会報告の様子が思い出されます。

鱒渕先生は平成元年4月に本学（赴任当時は鹿児島経済大学）に赴任し、以来31年間の平成の時代を本学の英語担当教員として勤務されました。英文学関係の学会に所属していたのでしょうが、私は鱒渕先生の研究については正直ほとんど存じ上げておりません。メルヴィルについて紀要に連載されていますが、先生が私にご自身の研究について話をすることはありませんでした。以前、私があまり小説を読まないといった話をしたとき、先生が「小説を読まない人間は人生半分損している。」と言っていたことが印象的で、この言葉は私の頭に刻み込まれています。と言っても、私が小説を読むようになったかといえば、残念ながら相変わらずです。ただ、鱒渕先生の読書量に遠く及ばないことは理解できましたので、彼が私に中央公論社発行の「世界の名著シリーズ」はお買い得だよと紹介されたとき、なぜか全巻買い揃えてしまいました。時々、手を伸ばしていますが、この本と一緒に鱒渕先生との思い出も残るのだと思います。

私は鱒渕先生の前年にこの地に赴任していたのですが、分野は英語と体育、研究室も5号館とフィールドハウスといった具合で遠く離れており、接点は少なかったのですが、ひょんなことから私的な交流が続くことになりました。きっかけは、彼が車の物損事故で動けなくなっている時に言葉をかけたことから交流が始まったように思います。動けなくなったと言っても怪我をして動けなかったということではなくて、車が動かなくなって動けなくなった訳ですが。話をするうちに鱒渕先生は昭和32年9月23日生まれで、私と誕生日が3日違いであることを知りました。また、学生時代を東京で過ごしていたことなども聞き、似た者同士といった印象を持ったことがお付き合いの始まるきっかけだったかと思います。

私が平成8年の8月から1年間の渡米を前に先方との手続きをやり取りしている際や、韓

国での学会発表時の英文ポスター作製にあたって、足しげくフィールドハウスから５号館の先生の部屋に通わせていただき、通じる英語に修正をお願いし、いつも丁寧に面倒を見てもらったことも印象深い思い出です。部屋では、いつもコーヒーをいただきました。

また、40 歳を過ぎたころからゴルフに一緒に出掛けるようになりました。非常勤でゴルフの授業を担当いただいていた山元篤郎先生に、毎週昼休みに一緒に指導を受け、それからコースを回るようになりました。今は閉鎖されてしまいましたが、当時、錦江高原ホテルには格安で 18 ホールプレイができましたので、土曜日の午後に薄暮で 18 ホール回っていました。その頃が一番顔を合わせていた時期のように思います。ゴルフを始める前、彼はテニスが好きであったようで、当時本学に在職していた平木場浩二先生とプレイされていたようです。私にとっては、スポーツを愛好する仲間といった存在でもありました。

ゴルフを始めてからは、それまで吸っていたタバコもきっぱりと止め（お酒は飲まない人でした。）体重にも気を付け、健康管理については私よりも注意を払っていると感心していました。彼がタバコをやめたきっかけははっきりしていて、頴娃にあるショートホールのゴルフコースを回っているとき、息苦しさのため満足にコースを回れなかったことがあったのですが、それがきっかけでその時からきっぱりと、すっかりやめられたようです。

60 歳までは、これといった大病は患っていなかったと思いますが、突然、入院、休職といった事件が昨年から生じました。最初の頃はそんなに気にかけていなかったのですが、病名を聞くとホジキンリンパ腫ということでした。耳慣れない病名でしたが全身を蝕んでいるということで、まさかと思ったところでした。ご本人と奥様との闘病生活を詳しくは承知しておりませんが、当初は治療の効果も見られ、自宅に戻られたときは私を自宅に招いてくださり、明るく治療の様子や回復状況について話をしてくれました。この頃は、回復して動けるようになったら、また一緒にコースを回ろうといったことを話したりもしていました。

再発しないように根治を目指すということで、かなりきつい、症例の少ない治療もされたようです。そのせいもあって、リンパ腫の方は回復されたようだったのですが、その後、腎臓を患い人工透析も数週間されたようです。これも乗り越えほっとしたところに肺炎を発症してしまったようです。入院中は何度か病室に足を運びましたが、常に病気に打ち勝つ強い意志を、奥様と二人、ともに持ち続けていました。

今年度の前期は回復し数回の授業をしたところでしたが、学期途中に病状が悪化し最後ま

写真：在りし日の鱒渕さん（ゴルフ場にて）

で担当することは叶いませんでした。学期途中のリタイヤは本人も辛かったことと思います。入院中も後期の授業のことをいつも気にして、学生、先生方はもちろん事務職員の方へも申し訳ないといったことを話していました。

彼が亡くなる数日前に病室を訪れた際には、奥様が彼の細くなった両足を一生懸命に摩って、話しかけて、それに答えている彼の息遣いがありました。残念ながら、彼とはこの時が最後になってしまいました。

【鱒渕文庫―社会福祉学会室の書棚に】

鱒渕先生は、古村先生の思い出のなかにもあったように、すぐれた読書家でした。ご自身の専門である英米文学は言うに及ばず、日本文学（古典も含めて）、精神分析学、哲学、宗教学、歴史学等々、その関心は広範囲にわたっていました。また、大変な蔵書家でもあり、その蔵書は大学の研究室やご自宅の書架に溢れておりました。そして、とても整理好きな先生は、きちんと図書を分類されておられました。

先生の研究室の蔵書が片付けられてゆくのを（その多くは古本屋へと消えてゆきました）とても残念に思ったのは私だけではなかったと思います。そこで、奥様佳代子さまの許しを得て、研究室のご蔵書の一部を寄贈していただきました。それらは、社会福祉学会室の書棚の一部をお借りするかたちで現在保管してあります。社会福祉学会室をご利用の際には是非一度手にとってご覧になってください。（M）

鱒渕先生のご蔵書（社会福祉学会室・五号館四階）

新任教員の挨拶

有村　玲香

母校に帰って参りました。私は、平成 14 年度に本学社会福祉学科を卒業し、児童指導員として児童発達支援事業（旧：児童デイサービス）に約５年勤務しました。その経験より、児童発達支援に対する課題意識と研究意欲を抱き、現在は「療育（児童発達支援）に携わる専門家の研修プログラムの開発」について地域に根ざしたリハビリテーション（以下：CBR）の視点から研究に取り組んでいます。

本学では、子ども関連科目の「子ども家庭福祉論」や「子ども分野の実習指導」等を担当し、社会福祉士の養成を担当しています。地域の中では、子ども福祉に携わる保育士や幼稚園教諭の研究支援や、教育委員会と協働して特別支援教育におけるペアレントトレーニング研修などに取り組んでおります。

久しぶりに母校に戻りましたが、「学生」と「教員」の立場の違いと、私自身がこの異なる立場を体験できていることの連続性を感じ、新鮮な刺激にあふれる日々を過ごしております。現在の鹿児島国際大学では、「だれもが幸せに暮らせる社会を実現する豊かな人間力と確かな実践力を育む」ことを目指し、ソーシャルワーカーの養成を行っています。また、「鹿児島から、世界を」を合い言葉にして、介護や教育、社会保障、児童虐待等を初めてとした様々な問題に真正面から向き合い、よりよい社会実現の方法について学生と教職員が一体となって、社会福祉学の深化について励んでいることを素晴らしく思います。

このような、素晴らしい大学教育の中で、私が考える福祉心理的視座は、「身体的側面」「社会的側面」「心理的側面」を含むことです。身体的側面は、生活場面のなかで障害特徴や行動特徴への直接的・具体的な発達支援を行うケアワークと捉えています。社会的側面は、障害のある子どもたちを社会資源に結びつけることや , 社会参加や自立を支援するなど「社会環境や社会関係上の機能障害を調整して生活の立て直しを図る外在的な援助」(大和田 2004) を行うソーシャルワークと捉えています。心理的側面は、「対象者のパーソナリティの諸問題（心理的・精神的機能）に働きかけて意欲や動機を引き出したり、自我に働きかけたりすることによって心の立て直しを図る内在的援助」（大和田 2004）によるカウンセリング効果の発揮やエンパワメントと捉えています。

この３つの側面を、本学の専門教育の中で学問的に体系的・統合的に関連づけて、実践する専門家を養成できるように、精進いたします。これからも、どうぞよろしくお願いいたします。

リスタート、鹿児島

茶屋道拓哉

2005 年の春に鹿児島を飛び出して（というほど遠くもない）、14 年間熊本の大学で教員生活を過ごしてきました。鹿児島を離れる前、恩師・高木邦明先生に「武者修行してきなさい」と言われたことをいつも思うのですが、修行したのかしてないのか、居心地の良い熊本での生活を満喫して 2019 年の春に鹿児島に戻りました。20 代だった私も、今は 40 代。すっかり、「オッサン」になっています。

14 年間で「変わった事と変わらない事」、その両者を楽しみ（時には悩み）ながら、この 1 年目を過ごしています。改めて、熊本で過ごした時間（平成時代の約半分）は長かったなと思います。出来たばかりの九州新幹線（鹿児島ルート）と特急リレーつばめを乗り継いで熊本へ向かった頃が懐かしく、今となっては全線開通により「超高速地下鉄」と化し、風景を楽しめない旅路が当たり前になりました（便利ですが）。

鹿児島を離れる頃、市町村合併がありました。こちらへ帰り、何やら聞きなれない自治体名に「そこ、どこ？」。公共の建物にはネーミングライツによる呼称が付き、これまた「それ、なに？」。

電車通勤すると、広木駅ができていたり、上伊集院駅で大勢の人が乗ってくるようになったり（松元町→鹿児島市になるとこうも違うのか）。高校の偏差値ランキングでは下剋上も（失礼か？）。天文館ってこんなに人通り少なかった？（三越もタカプラもなくなってる！）と思うけど、人口減少社会ではこんなものかと思いつつ。でも、アミュプラザはしっかり増築していて、中央駅界隈の変貌ぶりにびっくり。

これだけ書くと、何やら鹿児島初心者のような雰囲気がしますね。でも、変わっていない所もちゃんと理解しているつもりです。変わらないのは、蒸し暑さと火山灰に耐えながら実習巡回指導をする鹿児島の夏。それと、「JR 以外の交通機関で使えない Suica」（笑）。

時代は平成から令和へ。私自身もそろそろ「使い慣れた熊本弁」から「感覚を取り戻しつつある鹿児島弁」に切り替わる頃。鹿児島の学生と共に、「今、1 円にもならないことを考えることができる環境」を大切に育みながら、日々を過ごしたいと思っています。

どうぞよろしくお願いします。

迷走的突発レポート

有園 菜央・佐々木 晶

まえがきという名の説明

こんにちは！２年生２人組です。今回も『ゆうかり』の自由記事を担当させていただくことになりました。今回は合唱鑑賞レポです。だけど行ってきた写真とかもないです。文字ばかりです。よろしくお願いします。あ、寂しいので「いらすとや」の素材を応急処置として貼っときますね！

迷走的突発レポという名の感想

今回も『ゆうかり』の記事を担当させていただくこととなり、何について書くか２人で迷走していました。何かいい題材はないかと鹿児島市で行われるイベントを探していたところ、チェコ少女合唱団＜イトロ＞が鹿児島市民文化ホールに来るという記事を発見しました。みなさんは合唱というとどんなイメージをお持ちでしょうか？　私たちにとって合唱は学校の行事あるいはクラブやサークル等で行われているものというイメージが強く、また少し堅苦しいイメージもあります。合唱曲に造詣が深いわけでも特別興味があるわけでもありませんが、「チェコから合唱団の方々が来る、なんか面白そう」、ということで 12 月７日に市民文化ホールに行き鑑賞してきました。

今回のコンサートは鹿児島市制 130 周年記念に行われたもので、鹿児島市立少年合唱隊の方も出演されました。２部構成で計 22 曲 (うち２曲は鹿児島市立少年合唱隊による合唱、１曲はチェコ少女合唱団＜イトロ＞と鹿児島市立少年合唱隊によるジョイント合唱) の２時間ほどのコンサートでした。

コンサートが始まると白いシャツに真っ赤なスカートの揃いの衣装を着た 30 人の少女たちがステージに上がりました。曲ごとに少女たちの立ち位置は変わり、ステージだけでなくホールの通路などにも立ち、ホール全体をステージとして綺麗な歌声が響き渡りました。お

そらくおおよその立ち位置は決められているのでしょうが、ステージ上やホール内を自由に動く姿からは合唱の堅苦しさなどは感じませんでした。

第１部の後半ではグルーバーの「きよしこの夜」が演奏されました。照明が落とされ１人が持ったキャンドルから分火され灯りが広がっていく演出はどこかほっとするような気がしました。演奏曲目のほとんどは知らないものでしたが、高く澄んだ声がホール全体に響き渡る様は圧巻でした。プログラムに曲目と簡単な紹介が書いてあり、開演前や第１部と第２部の間の休憩でさっと目を通しただけでしたが、曲について少し勉強してから聴くとまた違った聴き方になったかと思います。

第２部では衣装が変わりチェコのボヘミア地方の民族衣装のような装いでした。ヴィカールの「山の人たち」という、田舎の人と都会の人の小競り合いを楽しく描いた曲の演奏はちょっとしたミュージカルのようでした。

最後は鹿児島市立少年合唱隊とのジョイント合唱で「花は咲く」を演奏されました。私も中学生の時に合唱で同じ曲を歌いました。サビの高い音が印象に残る曲ですが、やはりとても綺麗な高音で日本語の発音も滑らかで自然と惹き込まれるような素敵な時間でした。

演奏曲を紹介しようとするとどうしても日本でも有名な曲や日本の曲が多くなってしまい自分の語彙力の低さが悔やまれますが合唱のイメージが少し変わる、とても楽しい一時でした。

合唱が終わるとCDの販売とかサイン会とかあったのですよ。その時はスルーしたのですが今思うとサイン貰っておけば良かったなー！　惜しいことをしました。

会場なのですが、ほぼ満席という感じでした。普段こういうものに行くことがないので人がどれくらい来るかわからなったのですが、老若男女問わず、でした。自分たちが普段過ごしている層ではない人（合唱とか絵画鑑賞とかするタイプの人）などと同じ空間にいるというのが少し不思議な感じがしました。まあ私たち２人のうち片方は美術館とか好きなのですが。でもなんかこう…違うのですよねぇ。絵を鑑賞するのは１人なのですよ。でも合唱は、聴いている人の存在に配慮しながら聴くというか。皆で聴くというか。

書いていてわからなくなってきました。なんかそんな感じです。興味を持った人はぜひ！芸術鑑賞はいいぞ！

あとがきという名の紹介

今回私たちが鑑賞しに行ったチェコ少女合唱団＜イトロ＞のパンフレットの紹介を載せておきますね。これ許可とかいるのかな…。まあなんかあったら編集の先生がおそらくどうにかします。大丈夫です、多分。あ、ちなみに＜イトロ＞には公式 Web サイトも公式 Instagram も公式 Facebook もあります。

公式 Web サイト：http://www.jitro.cz
公式 Facebook：https://www.fscebook.com/KralovehradeckyDetskySborJitro
公式 Instagram：https://www.instagram.com/Jitrochoir/

私もサイトに行ってみたのですが文章が英語ですらなかったので読めませんでした。何語かもわからなかったです。ドイツ語……？チェコ語……？わからない……。

1973 年ボヘミアの古都フラデツ・クラーロベーに創設。６つの予備課程に約 350 名の生徒が学び、その中から選抜された 30 名のみがステージに立つことが出来る。第４回世界合唱コンクール（2006 年厦門）で総合優勝し国際的に注目を集めるなど、2018 年までの間に出場した国際コンクールで実に 35 回もの優勝を飾っている。

世界最高の女声合唱の一つとして名高く、ヨーロッパ各地やカナダ、香港など世界各地でツアーを行い活躍。これまでに開催したコンサートは 2900 回を超える。特にアメリカでは「少年少女合唱の歌唱形式に決定的な革新をもたらした」（Ｄｒ．ラーオ／トロント大学教授）と絶賛を博し、これまで 14 度の全米ツアーを果たした。

音楽祭の招聘も数多く、2003 年にはプラハの春音楽祭でミュンヘン交響楽団と共演し、モーツァルト作品の初演を行って話題を集めた。「ドヴォルザーク／モラヴィア二重奏唱曲集」をはじめ 37 種類のＣＤをリリース。近年では、チェコ・フィルハーモニー管弦楽団やホセ・クーラら、著名なオーケストラやソリストとの共演でも注目を集めている。

1977 年よりイジー・スコパル博士が芸術監督ならびに主席指揮者を務めている。

以上、パンフレットより。

書いていて思ったのですが、すごいところの合唱を聴きに行っていたようですね？わあ……。ちなみにチケット代は 2000 円でした。お得では？　採算とれているのかな。まあ、私たちが気にするようなことでもないですね。

今回私たちが合唱を聴きに行ったのはチェコから合唱団の方々が来る、なんか面白そうという興味本位からでしたが、なかなかいい経験をすることが出来ました。多分これを書かなくてもよかったら聴きに行っていませんでした。何かしらのきっかけを大事に生きていこうと思いました。ここまで読んで下さりありがとうございました！

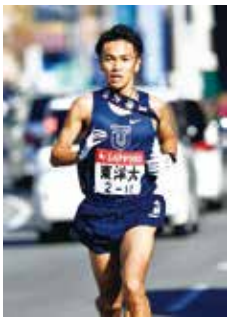
箱根駅伝グラフィティ

一氏　未奈

唐突ですが・・、この「ゆうかり」を読んで下さっている皆さんは箱根駅伝についてどのような考えを持っておられるでしょうか。箱根駅伝が好きで正月のテレビはずっと箱根駅伝が流れている人、箱根駅伝に全く興味が無い人など様々だと思います。ですが、今回の「ゆうかり」では箱根駅伝について紹介していきたいと思います！箱根駅伝が好きな人にはさらに好きになってもらいたいですし、箱根駅伝に興味のなかった人には少しでも興味を持ってもらえたらと思います！

金栗四三氏

１つ目は箱根駅伝の歴史についてです。昨年の大河ドラマ「いだてん」の主人公は金栗四三さんでした。金栗さんは日本人初のオリンピック選手という功績を残していますがその他にも箱根駅伝の開催に尽力したという功績もあります。この箱根駅伝（東京箱根間往復大学駅伝競走）は 1920 年に始まり、今年で 100 年目。大会としては第二次世界大戦の影響で中止となった年があるため今年で 96 回目の大会となりました。箱根駅伝のこの 100 年という長い歴史の中ではある事件も起こりました。それは 1925 年第６回大会で起こった「人力車夫事件」という替え玉事件です。気になった方はぜひ調べてみてください！


相澤晃選手

２つ目は箱根駅伝のコースについてです。箱根駅伝は、東京大手町から芦ノ湖までの往復 10 区間全 217㎞です。この 10 区間の中で特に注目されている区間は２区と５区です。２区は 23.1㎞と距離が長く１区を走った選手たちが集団で２区の中継所に襷渡しをすることが多いため序盤で流れを作りたい大学がエースを投入してくるコースでもあります。各校のエースが走るコースであるため、山梨学院大学や国士舘大学などエース級の留学生をもつチームは彼らを２区に配置しています。これまで、２区の区間記録は山梨学院大学の OB であるモグス選手が 85 回大会に出した１時間６分台が最速でした。ところが今年の箱根駅伝で学生最強ランナーと言われている東洋大学４年の相澤晃選手が１時間５分台を出して 11 年ぶりに区間記録を更新しました。相澤選手の走りは他の大学駅伝の選手から見ても異次元の走りなのか「人間じゃねぇ」や「あいつ、怪物か！？」などと言われています。(笑) 私も今年の箱根駅伝をテレビで見ていて１時間５分台の記録が出た時はテレビの前で「嘘でしょっっっっ！！！！」と姉と一緒に叫んでしまいました。(笑)

宮下隼人選手

５区は小田原から箱根芦ノ湖までの山上りの区間で、よく箱根駅伝の時期になるとテレビでも言われている「山の神」が出てくる区間でもあります。また、５区は標高差が 854m と大きいため、５区を走っている選手でときどき低体温症や脱水症状になってしまう選手もいます。５区の区間記録は東洋大学２年の宮下隼人選手が１時間 10 分 25 秒を出して、95 回大会に

樹立された区間記録１時間 10 分 54 秒を更新しました。

黄金世代（東海大学）

３つ目は５強と言われている大学についてです。今年の箱根駅伝では５強というワードが注目されました。５強というのは青山学院大学・東海大学・東洋大学・駒澤大学・國學院大學の５大学です。

青山学院大学は 2015 年の初優勝以来、箱根駅伝４連覇そして今年の 96 回大会の優勝校でもあります。また、2017 年には箱根駅伝３連覇、箱根駅伝と並んで大学三大駅伝と言われている出雲駅伝・全日本大学駅伝で優勝を飾り、３連覇３冠を達成しました。他大学を応援している私からしたら、青山学院大学を率いている原晋監督の采配ほど恐い物はないと思っています。

田澤廉選手

東海大学は 2019 年の箱根駅伝優勝校で、その年の全日本大学駅伝でも優勝を飾りました。また、今年の箱根駅伝を走った４年生は黄金世代と呼ばれた学年でもあり、今大会での総合２位という成績に貢献しました。

東洋大学は箱根駅伝優勝回数４回で 2010 年に箱根駅伝２連覇達成と現在の酒井監督が 2009 年に監督に就任してからは箱根駅伝での成績は 11 年連続３位以内と安定していましたが、今年は総合 10 位とシード権内ギリギリの成績でした。また、東洋大学の OB には男子マラソンの前日本記録保持者である設楽悠太選手や東京オリンピック男子マラソン日本代表に内定した服部勇馬選手がいます。駒澤大学は平成の常勝軍団と呼ばれた大学で、平成初となる箱根駅伝４連覇を達成しました。また、今年の箱根駅伝で３区を走った１年生の田澤廉選手はスーパールーキーとして注目されています。

國學院大學は 2019 年の出雲駅伝で初優勝を飾り、昨年・今年と箱根駅伝で山上りの５区を走った浦野雄平選手は昨年５区の区間記録を更新しました。そもそもは、國學院大學を除いた青山学院・東海・東洋・駒澤大学の４校で４強と呼ばれていましたが、國學院大學はその４強の勢力図を変える形でここ数年の間で成績を伸ばしてきた新興校でもあります。箱根駅伝や出雲駅伝・全日本駅伝ではこの５強に注目して見るのもとても面白いですが、箱根駅伝を見るうえで注目してほしい箇所がまだあります！それはシード権争いです。

４つ目はシード権についてです。箱根駅伝では上位 10 位までの大学は翌年の箱根駅伝への出場が自動的に決まります。ですが 11 位以下の大学は翌年の秋に開催される予選会で 10 位以内に入らないと本戦である箱根駅伝には出場することが出来ません。予選会では出場校の選手各 12 名までが約 21㎞を走り、上位 10 名のタイムが集計され合計タイムの上位 10 校が本戦へ出場することが出来ます。この予選会の模様はテレビで見ることが出来ます。

予選会の様子

５つ目は繰り上げスタートについてです。箱根駅伝では車両の混雑が予想されるため繰り上げスタートというルールがあります。往路では２区・３区の中継所で先頭の通過から 10 分、４

区・５区の中継所では先頭の通過から 15 分、復路の全ての中継所では先頭の通過から 20 分で繰り上げスタートとなります。繰り上げスタートなる大学はそれまで１区から繋がれてきた襷が途切れてしまうことになります。今年の箱根駅伝の復路でも繰り上げスタートがありましたが、その場面はこのような簡単な言葉で表していいのかとも思いますが、見ていてとても悲しくなります。

繰り上げスタートの様子

６つ目は、箱根駅伝に出場する選手たちについてです。箱根駅伝を見るうえでは各大学の選手についてある程度は知っていた方が面白味が増します。駅伝を見てみたいと思っているがどんな人が走っているのか全然知らないという人にぜひ見て欲しい番組があります！それは秋・冬にかけての前編・後編の２回 BS で放送される「密着！箱根駅伝　春夏秋冬」です。この番組では箱根駅伝に出場する各大学を取材していて選手たちの普段の様子など見ることが出来ます。

７つ目は GGN についてです。箱根駅伝を走った選手たちを生で見てみたい！という人にはぜひ見に行ってほしい大会があります。それがゴールデンゲームズ in のべおか（GGN）です。GGN は宮崎県延岡市で毎年ゴールデンウィークに開催されている陸上の大会です。この GGN には箱根駅伝に出場した選手が数多く出場しています。他にも、過去に箱根駅伝を走り現在は実業団で活動している選手も多く出場しています。選手の生のスピードを体感したいという人にはとても良い機会だと思います。

最後に、長々と文章を連ねてきましたが読んで下さってありがとうございました！最初に箱根駅伝について書こうと決めた時は駅伝に全く興味のない人たちにぜひ興味を持ってもらいたいと思って書いていましたが、途中から「あれ、これどういう目的で書いてるんだっけ」「こんな文章で本当に興味持ってもらえるかな？」と思い始めるぐらい文章が変になってしまいました。

最後までグダグダになってしまいましたが、一人でも多くの人に箱根駅伝に興味を持ってもらえれば幸いです！

【書評】有川ひろ『レインツリーの国』新潮文庫 2006 年

草野　春香

著者：有川　ひろ (2019 年に有川浩から改名)
誕生：1972 年 6 月 9 日生まれ
出身地：高知出身
受賞歴：電撃ゲーム小説大賞 (『塩の街 wish on my precious』)
　　星雲賞日本長編作品部門　(『図書館戦争』シリーズ)
作品：『塩の街 wish on my precious』（デビュー作）
　　『海の底』
　　『空の中』
　　『図書館戦争』シリーズ
　　『植物図鑑』
　　『旅猫リポート』
　　『フリーター家を買う』　　他多数

作風：インタビューでは、自作について「大人向けのライトノベル」と語っている。デビューから暫くの間は SF やミリタリーといった色の濃い作品を発表していた。デビュー作から 3 作続けて、自衛隊と未知の物体・生物との接触をテーマにした作品を発表しており、陸上自衛隊の『塩の街』、航空自衛隊の『空の中』、海上自衛隊･海上保安庁･機動隊の『海の底』は合わせて自衛隊三部作と称されている。また、2006 にスタートした『図書館戦争』シリーズでも「図書隊」という架空軍事組織が存在するパラレルワールドが描かれている。2006 年頃からは、『レインツリーの国』や『阪急電車』など、実世界を舞台にした作品も刊行されている。

「私が書きたかったのは『障害者の話』ではなく『恋の話』です。ただヒロインが聴覚のハンデを持っているだけの。」

これは、この本、『レインツリーの国』の作者である有川ひろが、あとがきで本作を語った際の言葉である。この本を読了した後、もう一度この言葉を振り返ってみてほしい。

本書は、有川ひろの『図書館戦争』シリーズの 2 作目の『図書館内乱』（アスキー・メディアワークス）と内容が 1 部リンクしており、『図書館内乱』では『レインツリーの国』がキーアイテムがとして登場する。新潮社とアスキー・メディアワークスとのコラボレーション企画として、この 2 冊の本は 2006 年の秋に刊行された。

『図書館内乱』では 1 エピソードとして中途失聴と難聴を扱っている。作者の夫が突発性難聴にかかり、早く病院にかかったことと、医師の的確な治療で回復したという経験を 2 度もしたと言うことで、難聴の恐怖や取り返しのつかなさを微力ながら書きたいと思い、『図

書館内乱』のエピソードが出来たのだが、調べるほど「中途失聴及び難聴の方を主人公に据えた恋愛物が書きたい」と思うようになり、本書『レインツリーの国』が発刊された。

私はこの物語は恋愛小説である、と同時に、難聴という障害にスポットライトを当てた作品の一つだと思う。

この物語の主人公は、感音性難聴を抱える女性と、健常者の男性である。主人公たちの抱える、苦悩や、生きづらさと共に、お互いの交流を通して、成長していく様子が描かれている。

ここで物語の冒頭のあらすじを少し紹介したい。

関西から上京して就職し三年目の社会人、向坂伸行は、ふと思い立ち、学生の頃に好きだったライトノベルをインターネットで検索してみる。

伸行にとってはトラウマを受けるくらい衝撃的な終わり方をした本だったので、自分以外の人がどのような感想を持ったのか気になり「レインツリーの国」というサイトに辿り着いた。

そこには、伸行と同じように、読了後に気持ちを持て余しようやく消化できた、という感想があり、それに感銘を受けた伸行は、管理人「ひとみ」に思い切って「伸」というハンドルネームでメールを送った。

「ひとみ」は都内に住む 20 代の女性らしく、伸行は彼女から返信が来たことに感激する。そして、誰かと小説について語り合いたかった二人の交流が始まる。

本書の魅力として、有川ひろの作品全般に言えるのだが会話の上手さがまず挙げられると思う。本書の巻末で解説を務める山本弘氏は「言葉のテニス」と称していて、なるほど言い得て妙だと感服してしまった。相手の心に言葉というボールを打ち込み、絶好の玉だと油断していたら思わぬ角度から返されて…というように言葉のラリーを繰り返すのだがこれが作者は本当に上手い。テンポよく自分の思いをのせて相手の玉を全力で打ち返している登場人物を見ていると、手に汗握るバトルを思わせる。

本書でも、相手を思いやったつもりで吐いた言葉が思わぬ反駁を受けたり、傷ついたり、言葉のラリーを繰り返し、愛を育んでゆく。

全５章で本書は構成されており、とくに２章の終わりから３章の初めにかけての伸とひとみのメールのやり取りや、４章の終わりなど、ページを捲る手が止まらない程、ハラハラドキドキしてしまう。

もう１つ挙げるとすれば、綿密な取材や参考資料を踏まえた上で、聴覚障害を「歩み寄るべき意識の違いの１つで、それ以上でもそれ以下でもない」というスタンスで書いている点である。

例えば、重量オーバーのブザーが鳴り続けているエレベーターから降りもせずそのまま乗り続けている人を見て、「迷惑だ」「図々しい」と思ったりはしないだろうか。字幕を鬱陶しいと思ったことはないだろうか。

健常者が普通にきこえると思っているブザーは聴覚障害の方にはきこえないので、音で知らせる以外の方法が必要であるし、鬱陶しいと思っている字幕は聴覚障害者の方にはテレビを見るための大事なツールである。

『レインツリーの国』では、健常者である伸と聴覚障害である「ひとみ」とのお互いの歩

み寄りが描かれている。どんな種類の障害なのか、どんなことが苦痛で、相手の為にどういうサポートをすれば良いのか手探りでぶつかり合いながら探していく。中々着地点が見つからず諍いやすれ違いも起こるがそれでも、行けるところまで行こうと手を取り合う２人を応援せずにはいられなくなる。

この話はフィクションだが、ノンフィクションかと思うほど登場人物がリアルで、もしかすると現実世界に居るのではと錯覚するくらい身近な存在に感じられる。物語の最後、ある人にとっては日常の一部かもしれないし、ある人にとっては特別なことかもしれないが、ヒロインにとってはとても勇気のいる行動、を起こすのだがそれは本書を読んで是非、彼女や彼の行く末を見守って欲しい。

また、難聴や中途失聴の違い、感音性難聴と伝音性難聴の違い、苦労していることなど、聴覚障害について詳しく、また分かりやすく物語に組み込まれているので、難聴について理解を深めることが出来る。福祉や障害は難しそうと敬遠している人でも、純粋にラブストーリーとして面白いので手に取りやすいと思う。

『レインツリーの国』の世界でも差別や偏見は確かに存在していて、ヒロインに傷を残してしまう。現実でもそういったことは多くあるだろう。この本を通して障害というものをもっと身近に感じて、障害・病気・性などの差別や偏見・固定概念のフィルターを外してもらうきっかけになってくれると嬉しい。

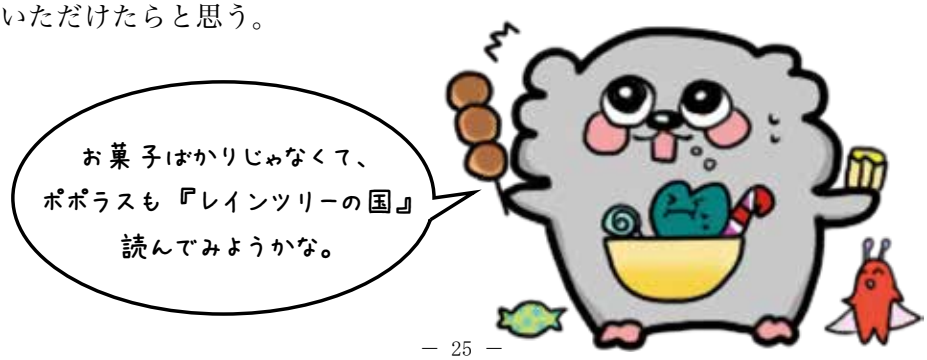
余談ながら、ここで少し「図書館戦争」をご存じない方のために解説をしようと思う。

『図書館戦争』シリーズのなかの「日本」では、1988 年に「メディア良化法」が制定、その施行に伴い、言論弾圧を行う組織「メディア良化委員会」が発足し、執行機関である良化特務機関の執行が妨害される際には武力制圧も行われる、という行き過ぎた弾圧が出現する。これに対抗するため、図書館は「図書館の自由に関する宣言」をおこない、「図書館の自由法」のもと、「図書隊」を組織する、という設定で物語は進む。

このシリーズの『図書館内乱』の「恋の障害」というエピソードに『レインツリーの国』は登場する。図書隊の隊員である小牧が、幼馴染で難聴者の少女の毬江に『レインツリーの国』を勧める。聴覚障害者の出てくる本を聴覚障害者に勧める行為は人権侵害であるという難癖とも取れる理由で良化委員会は小牧を拘束、拷問まがいの査問にかける。毬江は、大切な小牧を救うために、良化委員会に乗り込み…というストーリーである。

『図書館戦争』シリーズは番外編も合わせると全６巻で構成されている。

文庫本『レインツリーの国』は装丁を単行本から引き継いでいるので、『図書館戦争』シリーズを読もうと思っている方は『図書館内乱』でどんなふうに表紙が飾られているのかを確認していただけたらと思う。



新入生歓迎行事

古賀　政文

本年度も、恒例の新入生歓迎行事を、平成 31 年４月４日（木）に行いました。

2019 年度入学式終了後、正午から 13 時 30 分まで、ユーカリ会館２階ラウンジにおいて、新入生 68 名の入学を祝い、歓迎しました。

入学生と保護者､教職員合わせて 150 人ほどの参加がありました。今年度も昨年度と同様、多数の保護者の方々の参加があり、大いに盛り上がりました。

今回から、社会福祉学会の学生が中心となり、運営等を行いました。会場設営や進行、歓迎のことば、新入生へのインタビュー、後片付け等、工夫を凝らした、歓迎ムード一杯の歓迎行事となりました。

新入生からは、「自分たちの入学を歓迎していただいてうれしい」、「是非介護福祉士や社会福祉士等の資格を取得したい」等､入学を喜び､学びに熱い思いを語る学生が多くいました。

また、保護者からは、「親も入学を喜んでいる。姉も鹿児島国際大学を卒業したので、安心して入学させることができた」「初めて親元を離れて暮らすので心配。夢の実現のために、頑張ってほしい」など、我が子に対する不安と期待が入り混じった思いを伺うことができました。

１年生が入学して、１年が過ぎようとしています。大学卒業まで３年間ありますが、あっという間に卒業はやってきます。入学式のときの気持ちをもう一度思い出し、一人一人の学生が、これからも日々の生活をますます充実したものにしてほしいものです。

ソーシャルワーク実習 ―学生の感想と教員のコメント

社会福祉学科では、社会福祉士国家資格の受験資格取得のために、３年生のときにソーシャルワーク実習を行う必要があります。今年度の実習について、分野ごとに、学生の皆さんからの感想や担当教員のコメントをいただきました。

障害児者分野
茶屋道拓哉先生担当

地域住民と施設利用者との共生について

3年2組2番　甲斐　康平

実習前、私は施設利用者と地域住民の共生は実際にはされているのかという疑問点があった。地域住民は、障害者支援施設がどのような環境にあり、その中で支援がされているか想像がつかないだろう。私自身も社会福祉学科に入学する前まで、どのような施設なのか想像できていなかった。

私は障害をもつ人が地域の一員として社会にとけ込み、地域住民との共生社会を実現するためには、住民が「障害」について正しく理解し、１つの個性という認識を深めていく（偏見をなくしていく）と同時に、障害者自身やその家族が「障害」を受け入れ、「障害」と共存する意思を持つことが大切であると思っている。

啓発することは大切であり、啓発の手段として広報・宣伝活動、交流活動を施設側が行う事が大切である。私が実習をさせていただいた施設で行っているものとして、広報・宣伝活動と交流活動の２つがあげられた。まず、広報・宣伝活動として、施設が作っているお菓子を地域のコンビニやバザーに出店・販売していた。施設職員または利用者が地域住民に手渡し販売をすることで施設と地域住民の交流も行われていた。障害者と実際に交流し、ふれあうことによって得られる体験は重要である。地域住民が今まで学習した事と現実の体験とのギャップをふれあうことによって埋め合わせることで、障害者に対する新しい認識が確立される。

また、施設が催すスポーツ交流イベントに学生ボランティアを募り、学生との交流を図ったり、社会福祉協議会が主催する障害者との「ふれあいフェスタ」などのイベントのブースに販売のため出店したりすることで、自発的に日ごろ障害者と出会う機会の少ない人々との交流をすることができる。交流・ふれあいの機会は拡充できている。しかし、実際のところ施設側や施設を管轄する市町村側が行っているものがほとんどである。地域の側からのアプローチがされるような仕掛けと工夫が今後の課題になってくると考える。

医療分野
田中弘子先生担当

医療機関での実習を通して

3年2組　鳩野　祥菜

私は、医療機関で約１カ月の実習をさせていただきました。実際の現場では、大学です

でに学び終えたことでも全く理解できていないと感じることも多くありました。医療機関では、毎日わからない単語や制度の詳しい内容が飛び交っていましたが、日を重ねるごとに少しずつ理解することができる喜びを感じることもできました。私はとくに、MSW は病院ではどのような役割を担っており、また、どのような活動を行っているのかについて関心がありました。MSW は、院内での連携にとどまらず、役所や施設等との連携を取らなければならず、医療の知識はもちろん関連諸制度に関する知識まで習得しておく必要があります。また、身体機能、家族の状況や環境など、一人ひとりの個別性を考慮して、方向性を決定できるように情報を提供すること、それぞれの意向の確認をしていく必要があることを学びました。生活の場に戻り、その人らしく生活をしていただくために、退院前の調整準備は大切ですが、本人、ご家族は初めてのことが多く、戸惑うことが多いと思います。そこに MSW が関わり、退院後に携わる担当者も含めて情報共有をし、チームでの支援体制を整えることが大切であることを実感しました。短い間ではありましたが、さまざまな場面を体験することができ、多くの学びがありました。そして実習を終えた今、より知識を深める努力が必要であるとあらためて思っています。

児童分野
有村玲香先生担当

児童養護施設での実習を通して

3年4組　上田　悠里香

実習をとおして、ソーシャルワーカーとしての技術やスキルを多く獲得できた。同時に、自分自身の成長にも大きく繋げることが達成できる実習になったと実感している。これからも更なるスキルの獲得を目指し、ボランティアやその他の活動にも力を注いでいきたい。

福祉事務所分野
大山朝子先生担当

鹿児島市福祉事務所での実習を終えて

3年5組　辻　　賢輔

私は鹿児島市福祉事務所（障害福祉課、養護老人ホーム、保育園、保護課）および地域福祉課で実習をさせていただいた。障害者福祉課では施設・連携する機関、障害支援区分認定審査会等へ見学させていただいたが、とくに審査会についてはその決定により障害者の生活が大きく変わり、QOL に直結するため、その責任はとても重いと感じた。養護老人ホームでは、主に利用者とのコミュニケーション（受容・共感・傾聴技術を使った実践）を通して、関係づくりに努めた。入所されているほとんどの方が認知症だという事であったが、比較的自立されていたため、身の回りのことは可能な限り本人にしてもらい、それ以外のことを職員が手助けされていたことが印象的であった。保育園では､子どもたちとの関わりを通して、一人ひとりの行動や職員と保護者間の情報共有の様子を観察させていただいた。子どもたちとは発達に応じた接し方を心がけながら一緒に遊んだり、会話をしたりしてしたが、園児の行動の意図・理由を考え、見守りながら行動するよう心掛けた。保護課では、DV 被害者、薬物・アルコール依存、認知症高齢者などの生活保護受給世帯への同行訪問を通して、その生活実態を把握し、援助方針に沿って指導・助言する様子を見させていただいた。

以上のように福祉事務所での実習内容はソーシャルワークの「ミクロ・マクロ・メゾ」領域の視点が盛り込まれていたため、大変有意義な実習となった。実習指導者をはじめ、お世話になったすべての方々や利用者に感謝したい。

高齢者分野
中山慎吾先生担当

高齢者施設での実習を通して

3年2組　　三谷　麗香

私は、今回の実習を通して人とのつながりの大切さを強く感じました。介護老人保健施設では、医師や看護師、作業療法士や管理栄養士など様々な専門職が情報を共有し合ったり、意見を出し合ったりしながら支援の方向を考えていました。支援をするうえで専門職同士の連携は欠かせないものであり、それがうまくいかなければ良い支援を提供することはできないと感じます。退所するにあたっての家族と本人の意向が異なる場合や、本人は在宅復帰を希望していても現実的に難しい場合なども少なくなく、退所支援の難しさを知りました。座学では学ぶことのできない多くのことを実際の現場で見たり経験したりでき、充実した実習となりました。実習で得た学びを今後に活かせるよう、引き続き勉学に励みたいと思います。

社会福祉協議会分野
高橋信行先生担当

社会福祉協議会実習について

高橋 信行

実習先が決まらない

2019 年度のソーシャルワーク実習社会福祉協議会班の履修者は 13 名、すべてが無事に実習を終えた。当初は、予定していた実習先で実習ができなくなり、急きょ実習先を探さねばならないケースもあり、学生を不安にさせた。結局社協実習を断念せざるを得ない学生もいたが、別の学生は地元の学生でないにも関わらず社会福祉協議会のご厚意により、なんとかすべての実習をおえたケースもあった。関係する社協の方々にはお礼をいいたい。

地元学生だけに限定する社協もある

社会福祉協議会は地域福祉を推進する団体と社会福祉法にも規定されていることもあり、もともとその地域に住んでいた学生は、実習をする上で、有利な側面があるかもしれない。しかし、社会福祉協議会に関心を持って、自分たちの後継者を作っていきたいということで、他の自治体出身の学生も引き受けていただける社会福祉協議会もある。おそらく地元の学生、そうでない学生と区別をするのは、他の実習分野を含め、実習先の中では社会福祉協議会くらいだろう。できれば広い心で地域福祉の神髄を伝えられる社会福祉協議会にさまざまな学生を受け入れてもらえないかというのが指導する側の希望である。

マクロな視点１―運営管理をもっと学ぶべき

また最近実習後の指導で他分野の学生の指導に関わることもあるが、実習を終えた学生を対象にしたソーシャルワーク演習Ⅲ（他分野を含む）では、実習生が法人の定款や、その実

習先の基本理念を知らなかったり、組織の運営管理についてほとんど勉強していないことに唖然とするところがある。社会福祉協議会実習では、この側面は実習中に必ず学ぶ機会がある。

マクロな視点２－今社会で何が起きているのか

ソーシャルワーク演習Ⅲでは、学生報告のなかに「地域住民とのかかわりや連携、ニーズ把握」「事業所や法人が抱える課題等―経営等の在り方を含めて」「事業の見直しや新しい事業の創設について」について、記述を求める箇所を設けているが、個別援助については説明できても、これらの部分はほとんど白紙で出してくる学生も多い。実習において個別援助が基本であることは確かだが、できれば他分野の実習においてもこうしたメゾ、マクロレベルの実習を取り入れて欲しいものである。演習の後半には「無届介護ハウス」の問題等を提起しているが、それなりにこうした問題についても反応がある。制度や事業を所与のものととらえるのではなく、そのなかに様々な矛盾や課題があることにも気付いてほしいものである。

ソーシャルワーク実習報告会（2019 年 10 月 25 日：7 号館 710 教室）

社会福祉学科イベント

精神保健福祉援助実習について

岡田　洋一

本課程では、精神保健福祉援助実習とその関連科目である精神保健福祉援助実習指導Ⅰ～Ⅲ、精神保健福祉援助演習を連動させて、より深い気付きと学びが得られるような工夫を行っています。

年間スケジュールとしては、前期に精神保健福祉援助実習指導Ⅰで事前見学実習を行います。鹿児島市保健所ではスポーツ交流会などに参加します。また、鹿児島市精神保健福祉交流センター(通称はーとぱーく)、鹿児島県精神保健福祉センターでは講義を、県立姶良病院、谷山病院では見学を、地域活動支援センターひだまりでは当事者との交流を行い、学びを深めていきます。実習指導Ⅱでは事前指導と、事前協議会を実施して、実習指導者との協力関係を築いています。

夏季休業中に障害福祉サービス事業所8日間（64時間）と病院20日(160時間)、合計28日間(224時間)の実習を行います。今年度は履修者7名が、7か所の病院と、6か所の障害福祉サービス事業所で実習を行いました。実習中は毎週、巡回か帰校日指導(グループスーパービジョン)を行い、実習中に体験した様々な出来事をグループワークと個別面接を通して解釈し、人間的な学びの機会を得ながら自己覚知していきます。後期に入ると、実習指導Ⅲの中で、実習に関する学びを総括し、実習報告書を作成していきます。そのプロセスの中で、経験的な学びを理論的な学びに深めていくのです。その成果は、実習報告会で紹介されます。今年度の報告会には、実習指導者が25名参加しました(21名が鹿児島国際大学の出身者)。実習指導者は学生へ丁寧で貴重なフィードバックを行いました。学生はこの実習指導者からのフィードバックから大きな自信と安心感をもらうことが出来たのです。

また、実習を行うことを含めた現場でのソーシャルワーカーとしての動きや視点、価値と倫理を通年科目である精神保健福祉援助演習で学びます。前期は主に現場に行く前の学生ならではの視点で、後期は実習を行った上での現場を知った深い洞察を含めた視点で学んでいきます。様々な事例をグループワークやロールプレイを通して実践的に学び、学生同士のディスカッションを通してチームアプローチの在り方を理解することが出来るようになります。そして、病院実習を通し、次のように語っています。「様々な委員会やカンファレンス

に同席させていただき、どの場面でも各専門職がチームとして患者様に関わり、チームの中でそれぞれの役割が確立していると感じた。その中で、情報を共有することで支援を統一させ、それぞれの専門性を生かして支援の幅を広げていく必要性を学ぶことができた」。

学生は、実習を通して、精神科病院や障害福祉サービス事業所の現状を学び、そこに生活する生活者としての当事者とその家族の方々の想いや葛藤、人間的理解を深め、自己覚知していきます。そして、当事者の生活する環境としての精神科病院や事業所の在り方に気づいていくのです。当事者とその家族に関わる医療スタッフや事業所スタッフへどのような想いを持っているのか、スタッフは当事者とその家族へどのように関わっているのか、さらに、当事者と家族の間にはどのような背景と葛藤、想いがあるのかを学生自身が見出すように支援します。

そのような状況の中で精神保健福祉士は当事者とその家族への関わり方、そして他職種のスタッフが精神保健福祉士に対してどのような理解をしているのかを学んでいきます。当事者と周りにいる家族やさらに彼らを支援している援助スタッフとの相互作用を見出すことが学生の課題となっているのです。最終的には学生自身の生き方について洞察し、自己覚知を図ることになります。

ある学生はこう語っています。「患者様を一人の生活者として見る視点が大切であると学んだ。私自身、この実習を迎えるまで精神障害者の方と関わったことがなく、知識や多少の理解はあっても、どこかで根拠の無い怖さや偏見を抱いていた。それは、精神症状が活発な時の病状や患者様が生きてこられた過去にばかり目が向いていたからだと思う。しかし、実際の関わりを通して患者様のパーソナリティを知り、多くのストレングスに気づくことができた。実習前に感じていた怖さや偏見を感じることなく実習を終えることが出来たのは、この視点が学べたからだと思う」。

介護実習

岩崎　房子

介護福祉士課程は、介護福祉士と社会福祉士のダブル資格取得を目指し、ソーシャルワークの視点を備えた介護福祉士、ケアワークの視点を備えた社会福祉士の養成を目的としている課程です。

ここでは、介護実習について紹介したいと思います。介護福祉士課程では、3年次のソーシャルワーク実習の他に、卒業までに3回の介護実習を体験します。1年次には10日間の介護実習Ⅰ（施設実習）、2年次には22日間の介護実習Ⅱ（施設実習）、4年次には25日間の介護実習Ⅲ（訪問介護実習5日間＋施設実習20日間）を行います。福祉専門職である介護福祉士には、介護を必要とされる方々のよりよい生活を目指し、日々の生活をいかに支えていくかが問われてきます。そのためには、介護技術はもちろんのこと、介護を必要とされる方々の生活上の課題、介護上の課題をきちんとアセスメントできる能力と介護診断（介護上の課題の抽出）していく能力が求められてきます。

介護実習Ⅱ・介護実習Ⅲでは、実習のなかで受け持ち利用者様を選定し、介護過程を展開していきます。介護過程とは、利用者様が望む自分らしい生活を実現させるために必要となる思考過程のことで、その過程のなかに介護診断は含まれます。昨今、介護福祉士養成課程のカリキュラムに医療的ケア（喀痰吸引・経管栄養法）が加わり、医療チームの一員としてもなくてはならない専門職となってきました。このように多職種と連携・協働していくためには、介護技術とともに介護過程は必要不可欠なのです。

そこで以下に、介護実習Ⅱと介護実習Ⅲで介護過程の展開に関する2名の学生の感想を紹介します。

介護実習Ⅱ　　2年3組11番　福家　浩太

私は介護実習を行うにあたり、3つの実習目標を立てて臨んだ。3つ目の目標を「受け持ち利用者様を通して一連の介護過程の展開を実践する。」と設定した。私は、今回の実習を通して一連の介護過程の立案の実際を知ることができ、アセスメントは誰のために行うものなのかといったことを改めて理解することができた。実習開始当初は、アセスメントを行う際、どこに焦点を当てて情報収集をしていけばよいのかわからなかった。職員の方や実習担当教員からのアドバイスを受け、受け持ち利用者様のカルテ・ケアプランといった記録物、職員の方や受け持ち利用者様とのコミュニケーションのなかの何気ない会話からも情報収集を行っていった。情報を収集していくうちに、受け持ち利用者様には「移動」の項目に課題があり、プランを立てる必要があるのではないかと考えた。介護過程を展開して行く中で、「受け持ち利用者様の頑張りをしっかり言葉で表現して伝えていく」ということが、利用者様の意欲向上につながるのではないかと考え、具体策を立てていくこととし実施していった。実施していくうちに、「もっと改善したほうが利用者様にとってはいいかもしれない」、「こ

のプランは変更せずに続行していったほうがいいかもしれない」と評価を加えながら、介護計画の実践を重ねていくうちに、徐々に受け持ち利用者様から笑顔を見せていただける頻度が少しずつ増えていき、そのことが私自身のやりがいにもつながった。最終カンファレンスの際、実習指導者様から評価の部分 (フィードバック) の部分で「反省という視点ではなく、評価という視点での振り返りを増やしたほうがプランの改善につながるのではないだろうか」というアドバイスをいただいた。確かに、自身で具体策の評価を見返して実感させられた。この具体策は、誰のために立てて実行しなければならないのかという意味がここでよく理解できた。今回の実習で初めて介護過程の一連の展開を実践し、具体策を立てて実施、評価を行うことができた。また、この経験から、自分の中の良かった部分と改善しなければならない部分にも気づくことができた。いろいろな方向から受け持ち利用者様の情報収集を行い、アセスメントし、具体策を立てて実践することはできたと思うが、評価に課題が残る結果となった。今後は、特に評価について改善していきたいと思う。専門職として介護を行うということは、受け持ち利用者様の生活を現在より良いものにしていくという責任があると思う。そのためにも、次回の介護実習では今回の実習で見えてきた改善すべき部分を再度目標にして取り組んでいきたいと思う。

介護実習Ⅲ　　４年２組７番　坂元　宏熙

私は、今回の介護実習Ⅲにおいて、４つ目の実習目標に、「受け持ち利用者様を通して、一連の介護過程を展開することができる。」を掲げ、実習に取り組んだ。

担当利用者Ａ様の介護過程の展開を行っていったが、担当利用者様の選定が遅れてしまい、決定するまでに時間がかかってしまった。また、担当利用者様のフロア以外での実習が続き、取り掛かりも難しかったため、短期間で介護過程の展開を行っていくこととなったが、無事に最後の評価まで終えることができた。実習の中で利用者様を選定し、介護過程を展開していくのは２回目となったが、今回、改めてその難しさを実感することができた。Ａ様の情報を生活・介護の視点でアセスメントを行っていくなかで、徐々にＡ様の課題が見えてきて、Ａ様のこれまでの生活と現在がつながったという感覚を体験することができた。そして、介護上の課題を文章化するとＡ様の介護の視点が定まって、頭の中が整理できた。そんな体験のなかで、1 か月の実習を終えてみると、1 か月の実習では学べることは限られており、もう少し学びたい、時間がもっと必要だと感じた。Ａ様は認知機能が少し低下されており、十分な意思の疎通を行うことはできなかったが、自分なりにコミュニケーションを図りながら情報収集や支援を実施していった。Ａ様は歌がお好きな方で施設内でもよく歌われていたという情報を得たが、なかなか歌っている様子を目にすることはできなかった。しかし、実習最終の週に歌っていらっしゃる様子を見ることができた。歌をリクエストすると実際に歌ってくださり、少しＡ様との心の距離が近くなったように感じた。今回の介護過程の展開を通して、根拠に基づいた介護の実践の大切さを知ることができたとともに、利用者様から多くのことを学ばせていただいた。今回の実習で得た多く学びを今後に生かしていきたいと思う。

教育実習

古賀　政文

教育課程は、特別支援学校教諭、高等学校教諭（福祉、公民）、中学校教諭（社会）の教育職員養成を目的とする課程です。本学では、それぞれの免許状取得のため、主に５月から６月に掛けて中学校・高等学校での教育実習を、９月から１０月に掛けて特別支援学校での教育実習を行います。

今年度教育実習を行った学生の感想を紹介します。（教育実習報告会の資料から）

中学校･高等学校

アドバイス等

- 教材研究・授業の構成をしっかりと行えば、とても有意義な実習生活を過ごせる。
- 最初は不安だったが、とても貴重な体験になった。
- 大変だったが、自分を大きく成長させてくれる場であり、人生でも中々経験することのできない時間である。
- 情報を新聞やニュースから蓄積しておくとよい。自己紹介や司会等で役立つ。
- 大学で行う模擬授業とは比べ物にならない責任がある。模擬授業で実習を意識した授業準備をしておく。教員になるためには誰もが通る道、大丈夫、頑張って。
- 教材研究をしっかりする。ビデオなどの視聴覚教材があれば効果的。思春期の中学生の特徴を理解してグループ活動等を仕組む。
- 何でも自分から行動する。昼休みなど自ら生徒の中に入っていく。
- 挨拶は元気よく。何より大切です。
- 実習初日からの「モチベーションが大切」。積極的に生徒に中に入っていく。
- 事前の指導案作成が円滑な実習に繋がる。指導案を短時間に仕上げて質を上げる。
- 今からこつこつ準備しておく。事前準備が実習の余裕を生む。
- 授業準備等に追われるが、時間を上手く使って少しでも生徒と関わることが大切。信頼関係を築くことが授業にも影響してくる。
- 指導案の書き方が学校によって違うので、指導教諭に聞いておくことが大事である。
- 授業観察の記録をスムーズに書くために、記録と書く時間の確保が大切になる。
- ワードやパワーポイント等の基本的な使い方をマスターし、実習中の指導案作成に役立てる。
- 苦しい時は仲間や大学の先生、実習支援課の方などに相談すると気が楽になる。
- 生徒からは先生として見られているので先生としての振る舞いや話し方を事前にマスターしておくこと。
- 模擬授業の回数を増やし、教育実習経験のある先輩に見てもらう。
- うまくいかない時もあるが、反省や振り返りを次に生かしていく事が大事だ。

・　１週目は長く感じるかもしれないが、２週目・３週目はあっと言う間に過ぎる。常に物事に全力で挑み、１日１日を大切に。最後にうれし涙を！
・　記録関係も多いので、土・日を使って記入していく。
・　１週目・・コミュニケーション、実態把握、指導案作成、２週目・・多くの先生方に見てもらって授業づくり、３週目・・まとめの授業づくり
・　１０回の授業に対応する指導案作成は大変、指導案作成に慣れておくべし。
・　授業シナリオとして発問計画を立てておく。
・　やってみて分かることが沢山あるので、色々なことに触れることが大切である。
・　模擬授業のように時間も内容も上手くいくことはほとんどない。シミュレーションを綿密にしておく。
・　生徒の自己評価表に教師への要望欄を用意すると、次からの授業の参考になる。
・　「友達、お姉ちゃん」感覚にならないように距離感に気を付ける。
・　実習に行く前に、実習教科全体の勉強をしておく。
・　指導案作りに追われないように、前もって慣れておくことが大事。指導案のパターンを複数準備しておくとよい。
・　先生や生徒の一挙手一投足を観察して気付きを得る。
・　できるのであれば自分用のパソコンを用意しておくとよい。
・　睡眠時間不足になりがちなので、時間の有効活用が大事である。
・　福祉の教育実習では介護福祉の問題を解き、知識を身に付けておくこと。
・　他の実習生の授業を見ることは、とても勉強になる。
・　模擬授業以上に緊張するので、人前で話す機会をできるだけつくる。

特別支援学校

成　果

・　２週間という短い時間で生徒一人一人の実態を把握し、それぞれの生徒に合わせた指導、支援の方法を考えるということは難しかった。しかし、本当に楽しくて充実した２週間だった。生徒の成長を身近に感じられた、少しではあるが生徒の成長に携わることのできたと思えた貴重な実習となった。
・　生徒とのコミュニケーションの取り方を学ぶことができた。コミュニケーションの取り方としてノンバーバルな部分も活用する。少しの工夫で生徒たちの反応は変わってくる。
・　授業の構成について学ぶことができた。１時間１時間の授業は何のためにあるかを考えて学習内容を決めることによって、明確な授業になり、生徒の実態に合わせて授業を展開できる。
・　生徒や教師と関わることで実際の教育現場の難しさを知るとともに、生徒や授業について多くのことを考えることができる。
・　配当学級の生徒だけでなく他の学年や他学部の生徒とも関わることで、学校や生徒のことが分かってくる。
・　授業の展開を考えるときに、この生徒にはこんなことをしてほしい、こんなことが出来るようになったらいいなと具体的に考えることが大事である。

・　保護者とコミュニケーションを取ることに心掛け、生徒の様子を聞くことができた。
・　自分自身が大学で学んできたことを実践する機会であると考える。
・　実習を通して、物事に落ち着いて対応することができるようになった。生徒の行動には驚かされることも多くあったが、実習前より落ち着いて対応することができるようになった。

課　題

・　学習指導案の作成。明確に表現できなく、一貫性に欠けることが多く、ＳＴのことや机上のことなど詳細にできなかった。誰が見ても分る学習指導案が書けるようになりたい。
・　一人一人に合った教材を作ることがまだ十分ではなかった、教材研究をして生徒の興味を引くような面白くて楽しい授業ができるようになりたい。
・　生徒の実態把握をするためには、日々の積み重ねと試行錯誤が必要である。また、自分から行動を起こすことも大事である。授業中だけでなく、ふだんの生徒との関わりの中でも生徒の実態把握はできる。
・　教材研究の不十分さを改めて感じた。自分の身の回りには指導や支援に生かせるものが多くある。様々なことに関心を持ち、考えるということに意識することが大切である。
・　少人数のクラスでは、障害の重い生徒に目を向けがち。もっと全体を把握しながら生徒とも話したり、関わったりすることが大事である。
・　生徒への授業外の言葉掛けが消極的だった。授業外も大切な学習の場だと思って言葉掛けを行いたい。
・　生徒一人一人に合った言葉掛けが課題である。言葉の引き出しを増やして特別支援学校の先生方のように生徒に届く言葉掛けができるようにしていきたい。
・　様々な障害特性と支援の仕方についてさらに知識を深める必要がある。
・　全体を見ることができず、生徒の活動を把握しきれなかった。
・　過度な支援をしてしまい生徒の主体性を奪ってしまった。

アドバイス等

・　実習では、分からないことがあったら自己判断で行動するのではなく、報告・連絡・相談することが重要である。
・　今のうちから指導案作成の練習や特別支援に関する知識を蓄えておいたら、少しでも実習が充実したものになる。

社会福祉学科イベント

新入生ゼミナールⅡ「福祉施設見学研修」―ＣＯＣの一環として―

今年度で４回目となる「福祉施設見学研修」を、「新入生ゼミナールⅡ」の授業を活用して行いました。新入生ゼミナールは、６つのクラスから構成されているため、２つのグループに分けて見学を実施しました。１組から３組までは、喜入にある「社会福祉法人喜入会」を、４組から６組は、知覧にある「社会福祉法人敬和会」をそれぞれ訪問しました。

今回の見学がどのような体験だったのかについて、１年生たちの率直な感想や意見をご覧になってください。

１組　牧原　拓実

グループホーム瀬々串ではまず、デイケアの活動を見学、体験をさせていただきました。そこでは、コグニサイズという運動を行っていました。コグニサイズというのは、「認知＋体操」のことを言うらしく、認知症予防に効果があるとされています。実際に経験させていただいたところ、学生である自分たちですら難しいな、と感じるくらいでした。しかし、ただ、真剣に難しい体操をしているのではなく、トレーナーさんが難易度を調整しつつ、認知能力のトレーニングというものだけにならないように利用者の方々を楽しませながら活動をされていました。一つ一つの活動のなかにもしっかりとしたエビデンス(根拠)をもって行うという決まりがあるということでした。

また、ニコニコタウン喜入さんは、介護予防にも積極的に力を入れているということで、最新のトレーニング機器をデイサービスに導入しており多くの利用者が機器を利用しトレーニングに励んでいました。施設の方によると身体を動かすことは、身体的な能力の維持や活性化だけではなく精神的な面でも良い効果があるということでした。その効果あってか今まで見てきた老人施設のなかでもひときわ明るく活気がある印象を受けました。

１組　下山野　風香

今回、「にこにこタウンきいれ」に施設見学に行き今まで高齢者施設に持っていたイメージとガラッと変わりました。まず、施設自体がとてもきれいでそこにいるだけで楽しくなりそうだと感じました。また、職員さんも若い世代の方も多く働いていて、活気があり、利用者の方も楽しそうに過ごしていました。

お年寄りの方が、今まで住んでいた地域とは別の地域に身を移すというのは非常に体力と、パワーが必要になるそうで、馴染みのある環境、地元鹿児島で介護のサービスを受けながら生活をしてもらうためにあるのが「地域密着型サービス」だそうです。また、利用者さんのお部屋も部屋から海がみえたり、寝ていても心臓の動きがモニターで見られるようになっている「眠りスキャン」や排せつ物を匂いセンサーで１０分ごとにキャッチ利用者さんが快適に過ごすことができるようにする「ヘルパット」等たくさんの工夫がされていました。また、部屋の作りを狭くし、転倒しそうになったら手をつくことができる転倒防止のための工夫もされており隅々まで考えられている。と感じました。また、最新のスポーツ器具や設備が施されており老人ホームとは感じられなかったです。そのなかでも、やはり職員の方々が非常

に明るく元気があることが印象に残りました。
職員さんがこんなに明るくて優しいと利用者の方も毎日、安心して楽しく過ごすことができると思うし、元気をもらえると思いました。その効果で今まで閉じこもっていた方や、病気を患って元気がなくなっている方でも、回復の手助けになるのではないかと考えました。もちろん、最新の設備や医療も利用者さんにとっては非常に大切なものではあると思いますが、それ以上に職員さんの対応や手助けにより毎日を過ごすことができているのではないでしょうか。今回は、クライエントと職員さんの関係性を考えさせられました。

２組　坂本　孝佳

今回の活動をとおして、社会福祉施設における役割や高齢者に対する様々な取り組みを学ぶことができました。今回見学した「ニコニコタウンきいれ」では、特別養護老人ホームや有料老人ホーム、認知症ケア施設等の高齢者施設が近隣にあり、また中核にはクリニックがあり、充実したサービス環境が整えられていました。それぞれの施設に共通して、明るい雰囲気と利用者様を最優先に考えたケア内容が充実していて、利用者様が安心してサービスを受けられるようになっていました。コグニサイズや眠りスキャンなど、様々なケア内容のなかで一番印象に残ったのが、認知症ケアの一つである『ミッケルアート（回想法)』でした。懐かしい絵を見せることで、思い出話をしてもらい、コミュニケーションを広げてもらうだけではなく、脳機能活性化を促す効果が期待されるなど、私が今まで知らなかった療法と効果があり感動しました。地域の方々が参加できるトレーニングがあり、地域における福祉施設の役割について理解を深めることができました。

２組　永江　優衣

回想法『ミッケルアート』は、懐かしい思い出を思い出して、それをトレーナーに語ることで、古き良き心地よい記憶を思い出すもので、言葉で会話するものではなく、感情で会話するものだと知った。またこれを行うことで脳血流量も増加し認知症予防にもなるということだった。施設見学の事前に調べた際に、絵を見ただけで本当に効果が得られるのか不思議に思っていたが、実際に集団体操に参加することもなく一人で過ごすことが多かった方が、支援後には他の利用者様との関わりが増え、表情も豊かになっていったとうかがった。この事例を聞き、もし私自身が年をとった時、どのようなことをトレーナーの方に話すだろうと考えてしまいました。
「ニコニコタウンきいれ」で印象的だったのは、設備が整っているということだ。マットレスの下に設置されたセンサーにより寝返り、呼吸、心拍数等を測定し睡眠状態を把握することができる『眠りスキャン』は素晴らしい機器だと思った。私の祖母は一人暮らしをしており、口癖のように「死ぬときは一人だ。誰も気づいてくれないだろう。」と言っている。このような危機が、祖母と同じように不安を感じているお年寄りの一般家庭にも普及してほしいと思った。介護老人保健施設では、徘徊する利用者様のために、廊下を一周できるようにしている建物の構造からも、利用者様のニーズを大切にしようとする想いや工夫が施されていて、将来このような場所だったら安心して利用できるだろうと思った。具体的な行動ニーズに合わせて支援することが重要であり、私たちに求められていることは“チーム医療”であると再認識しました。

３組　岡元 綾華

実際に施設へ見学に行ってみて、まず驚いたことは、施設でリハビリに使われている機器の充実度でした。ランニングマシンなどジムなどで見るような機材が多かったです。施設の利用者の方々に合わせた個別プログラムを作成しているということでした。そして、プログラムを実行するのは理学療法士などのリハビリテーションの専門職かと思いましたが、この施設では介護福祉士の方が実施しているということで、こういう場面で医療と福祉の統合が始まり、介護の活動の幅が広がってきているのだと感じました。

また、実際に利用者が入所している施設の個室まで見ることができました。個室だと棚や物にその方の名前が貼ってあったり、ここには何が入っているといったシールが貼られていました。多床室においては、プライバシー保護のために、棚を壁のようにして仕切りを作るなどの工夫がされていました。

施設の中には、歩くだけでその人の姿勢や、歩き方の癖を計測できるという機器がありました。クラスの何人かが試し、「こういうことまでできるんだ！」と感心しました。さらに、職員の方から利用者と行っている「回想法」という療法についての話を聞きました。回想法を行うことで、他の利用者との交流も少なくリハビリにも消極的だった方が自分から他の利用者に話しかけるようになったり、その他の活動にも参加するようになった例をうかがいました。正直、回想法にここまでの効果があるとは思っていなかったので驚きました。今回の施設見学では、このように多くの学びがありました。医療と福祉という違う視点を持った分野から様々な情報を共有し、交換することで、ここまで多様な支援が可能になるということが分かりました。

４組　臼田　美佳

施設見学研修では社会福祉法人敬和会の４つの施設を見学させていただいた。「サポートセンター　る・トレフル」では、専門家や作業療法士に来てもらい、一人ひとりの子どもにあった支援をしている。子どもの頃からサポートを受けている人が 18 歳以上になっても使えるようにということでつくられた施設である。「特別養護老人ホーム　ちらん敬和の郷」では、利用者様の生活リズムに合わせながら全般的に介護している。終焉を迎える時まで、いかに楽しく生活してもらえるかを考えながら、利用者様と共に生活している。「知覧育成園」では、しいたけのあし切り、はるさめの計量・袋詰め等を行い、工賃をもらいながら作業をしている。一日を通して作業が難しい方は、３コマの作業の後、１コマはぬり絵や音楽で楽しむ活動が設けられている。

「障害者就労支援センター　みらい」では、雇用契約を結んでいる就労継続支援Ａ型事業と利用契約を結んでいるＢ型事業を行っている。ここでは、しいたけの栽培、パック詰め等を行っている。職員は、障害者の方が一日一日を楽しく過ごしてもらいたいという思いで、職員が体験し楽しかったことや障害がある方が経験したことのないことをどうにかできないかと常に考えているようだった。障害者施設から高齢者施設まで幅広い事業を展開されているが、それには理由があった。以前は、知的障害がある人は、特養への入所を断られていた。障害がある人も受け入れられるように敬和の郷は始まったということを知った。

４組　草野　春香

１時 30 分に知覧育成園に到着し、「サポートセンター　る・トレフル」へ向かった。障

害を抱えている人や子どもが通っている施設だった。大人の障害者の方は、就労ではなく、障害が重いため、指先の作業や日常生活動作などをしているということであった。施設内を回った時に、子どものエリアの方には小さなドアがあったが、そこは子どもが通るための穴になっているということだった。子どもと大人は年に数回関わりがある程度で、あまり関わりがない様子だった。児童においては、保育士や児童支援員、大人の方では、社会福祉士、看護師、介護福祉士が中心になって仕事に携わっていた。

次に、「特別養護老人ホーム　ちらん敬和の郷」へ向かった。ユニットケアをしており、施設内を回った際、利用者の方が話しかけてくれて、楽しい雰囲気だった。看取りの話があり、考えさせられるものがあった。その後、「障害者就労支援センター　みらい」の施設見学へ向かった。しいたけの栽培や加工の現場を見せてもらった。企業から委託を受けているそうだ。ここでは職員は、できないところはサポートするが、できるところは自分でやってもらうという支援を行っていて勉強になった。育成園は年齢層が幅広く、多くの方が利用されている。このように年齢の幅が広いということは、施設が地域の方と密着し、地域から頼りにされている証拠だと思った。

５組　三谷茂将

老人ホームでは、生活している方々の姿を見ることができた。授業では聞いていたが、ユニット式の老人施設がどういう構造をしているのか、それぞれの部屋はどうなっているのかということも知ることができた。また、第２の家として、全員で最後まで見届けたいという理念には、少し感動した。

障害児・障害者支援施設では、木材の良さをそのまま残していたり、広い庭があったりして、気持ちの良い雰囲気の建物だと感じた。また、落ち着かせるための部屋があったり、親子で使えるハンモックがあったりと、普通の保育園・幼稚園ではなかなか無いようなものまであったので、驚いた。

障害者雇用施設では、A 型・B 型のそもそもの違いから教えていただき、理解を深めることができた。働く姿を見ることができたが、障害をもつ方々は指導を受けながら働いていると思っていたので、それぞれが自分の仕事をしっかりとこなしていたのを見て、イメージが変わった。また、袋詰めの作業の仕方を教えてもらい、A 型と B 型の違いを踏まえつつ、作業内容を理解できた。

担当者の話から、障害者スポーツの指導をする方がいることを初めて知った。そして、事業所の了承を得て、その活動をしつつ働いていると聞いて、自分もそこまで動けるのかなとも思った。対応する方の一言・笑顔で原動力が生まれるとおっしゃっていたので、相手の方のために動けるような人間になりたいと強く思った。

５組　山口　凪

各施設、事業所を見学したことで多くの学びを得た。新ゼミでの事前学習により、その施設の取り組みや系統、利用者の方への心遣いなどをあらかじめ知っていたため、施設の方のお話や対応の仕方、機材の活用などで多くの点に気づくことが出来た。

「敬和の郷」では、お風呂に一人で入れない方が入れるように器具を使っていた。料理も職員の方がされているので、安心だと思った。「障害者就労支援センターみらい」では、きのこ栽培やお米のパック詰め作業などを職員の方ではなく、利用者の方が中心となって作業

をされていて、基本的には職員の方は温度調節などの難しい作業を中心に行うそうだ。出来ることは自分たちの力で行い、それを見守るというのは自立に必要なことだと感じた。利用者の方の特性に合わせて仕事内容が考えられており、それぞれの力が有効的につかえていた。施設におられる人々は、施設内で一日中過ごすことが多くなるため、「普通なら出来るはずの楽しみを十分に感じることが出来ていないのでは」という職員の方々の考えにより、夜や休みの日にリクリエーションに行けるようにお風呂、ごはんの時間をずらしたりして行ってもらっているという。とてもよい考えで、このような発想のできる福祉従事者になりたいと思った。

今回の見学では、事前学習のありがたさ、大切さを知ることができ、これからも事前学習をきちんと行おうと思った。ただ一点、施設の方に何も質問できなかったことが大きな反省点である。

６組　山﨑　栞汰

この施設見学で、就労支援施設など初めて見る施設があったので、自分にとっての福祉の形が変わった。そしてもっと幅広く福祉を学ぶ必要があると感じた。高齢者施設は、障害をもっている人は断られることがあるというのは衝撃ではあったが、考えたことはなかったので改めて考えてみると、福祉の課題はそこにもあると思った。

そして、まだ学び始めではあるが、福祉的な考えが少しずつ身についてきているという実感を持った。障害者が障害があるゆえに経験できなかったことを、どうにかして経験してもらいたいという気持ちであらゆる方法を考えるということは、私にとって大きな刺激であったし、入学当初は福祉といえば、高齢者や生活保護くらいしか知らなかったがこの見学でさらに知識が深まり、幅が広がった。

６組　町田　幸

今回、自から質問をした。今までなら自から質問することはなるべくしたくないと思っていたので、質問をしたことで疑問点を解消することができすっきりした。幅広い分野の施設を見学することができて、私がどの分野に興味を持ったのか分かった。

私は、障害の分野に興味を持った。就労支援の施設を見るは初めてで良かった。高齢者の分野では、障害のある人が高齢になった時に入る施設がないから「ちらん敬和の郷」ができた。その点も今まで私は疑問に思っていたので、知覧育成園は実際に特別養護老人ホームを作ったことで、他施設ではどのようになっているのか調べてみたい。私は将来、福祉事務所か社会福祉協議会で働きたいと思っている。しかし、障害者の分野は得意分野にしたいと考えているので今後、勉強に熱を入れていきたい。

演習論文報告会コメント

令和元年度の演習論文報告会（自主研究助成成果報告会も含む）は、12 月 6 日（金）の午後 1 時から、大学内の二号館、214 教室、235 教室の二教室で開催された。それぞれの教室における発表会について、上田雪子、岡田洋一の両先生にそれぞれ講評してもらった。

演習論文＆自主研究助成成果発表会（214 教室）

上田　雪子

214 教室では、演習論文報告者は神野志織さんと安庭あゆみさん、自主研究助成報告者は唐玉さんの 3 名の学生の報告が行われた。

第一発表者である上田ゼミの神野志織さんと安庭あゆみさんからは、「大学生の精油の嗜好の違いによる気分の変化」というテーマで発表が行われた。

青年期になる大学生が抱える様々なストレスにして、社会福祉学科の大学生の男女 30 名を対象に、イランイランとラベンダーの 2 種類の精油を用い精油の嗜好の違いによる気分の変化について明らかにすることを目的とし、心理学的指標、生化学・生理学的指標を測定および調査した結果、唾液アミラーゼ活性値および血圧値及び脈拍数の変化に関しては、各精油吸入前後のアミラーゼ活性値は各精油ともに上昇傾向が認められた。そのうち、ラベンダー吸入後は、精油の匂いが刺激となり反応したことや脈拍数に比べ血圧値は心身の影響を受け敏感に反応するが、各精油吸入前後の血圧値および脈拍数ともに有意差は認められず、リラックス効果を明らかにすることはできなかった。一方、POMS およびリラックス尺度の変化に関しては、香り肯定群のラベンダー吸入後にリラックス度が有意に高いことや香り否定群のラベンダー吸入後のリラックス度がわずかに高いことから、精油にはリラックス効果があることや嫌いな香りを嗅ぐことにより嗅神経の刺激伝達によって生じた情動が、自律神経系に影響を与え、有効なリラックス効果をえることができなかったことを報告した。本研究では、各精油吸入後は副交感神経系の亢進の傾向はわずかに示され、嗜好性に関係なく、各精油の主要成分がリラックス効果に影響を与えている可能性を明らかにした。

第二発表者である高橋ゼミの唐玉さんからは、「討論型世論調査（Deliberative Poll）に対する一般的な認識と研究動向の調査」というテーマで発表が行われた。

荻原幸子 (2014) の「『エネルギー・環境の選択肢に関する討論型世論調査』に関する新聞記事の動向」という論文の成果を基礎として、今まで（2010 年から 2019 年まで）の一社の全国紙の記事により、討論型世論調査について記事内容の分析、および新聞報道と市民の社会参与意識の間に相関性が見られるという仮説で、計量テキスト分析のみに焦点を当てた結果、「市民参与」記事群は「意見聴取」記事群より全体に占める割合が多い。今回のテキスト分析対象も少なく、データとしては十分であるとは言えないこと、また、新聞報道と市民の社会参与意識の間に相関関係が見られるのかどうか、本研究では実証的検討を試みると予想したが、市民の社会参与意識について引用資料は自由回答データではなく、計量テキス

ト分析のような操作を利用しておらず、新聞報道と市民の社会参与意識の相関関係を確認できないことが報告された。

235 教室における演習論文報告について

岡田　洋一

235 教室では佐野先生が座長を務めた。発表者は上田ゼミの松尾 愛里沙さんと岡田ゼミの川野 祥正さんだった。まず川野さんから「触法行為を行なった者の地域移行定着についての現状〜警察官・保護司の語りから見えてくる現実と課題〜」というテーマで報告を行った。このテーマを設定した理由は 1991 に起こった大量殺人未遂事件や 2015 年に起きた川崎の中学 1 年生が起こした殺人事件などを知り、なぜ未成年の殺人事件が起きるのか、また、その犯罪を起こした若者が刑を終えた後、どのように社会復帰するのかという事を明らかにしたかったからだと述べた。そして犯罪白書から現代の犯罪の状況について報告をした後に、警察官と保護司へのインタビューについて分析を行った。その報告の中で家族や地域が出所した当事者をサポートすることの大切さを語っていた。

松尾さんは、「発達障害児へのアロマオイルを用いたハンドトリートメントの効用」というテーマで報告を行った。彼女は自閉症や ADHD・注意欠陥多動障害などの独特な行動がみられる子供たちへのハンドトリートメントの効果について調査票を配布回収し検討を図った。また、3 歳〜 5 歳の男児 5 名の対象者に対して血圧や脈拍、抹消動脈血酸素飽和度を測定、手指の温かさの程度もはかりハンドトリートメントをすることで副交感神経が優位になっていることを明らかにした。また、この調査を行う中で子どもたちと接し続けることになり時間の経過とともに子供たちが学生に対して「マッサージして」と自ら手を差し出すようになった。さらに家で「夜に途中で起きなかった」という母親からの報告もあった。子供たちとの触れ合いとハンドトリートメントが発達障害のある子供たちをリラックスさせ、子供の発達を促すのに有効な一つの手段となりうることを明らかにした。

会場には 50 人を超す学生と 6 人の教員が熱心に二人の報告を聞いていた。教員や学生からの質問にも誠実に答えることができていた。座長である佐野先生から積極的な評価とアドバイスがあった。会場と二人の演者は多くの事を学ぶことができたのではないかと感じた。

自主研究助成による研究報告

社会福祉学会自主研究助成は、「国際大学社会福祉学会・学生会員の自主的な学習・研究活動の活性化を図る」ことを目的に、毎年、自主研究（ゼミを含む）や特色あるボランティア活動・実習活動報告等を行う学生に対して、本年度より課題１件あたり５万円を上限として、総額 15 万円を限度に助成しています。

例年、社会福祉学科の学部生や福祉社会学研究科の大学院生による活発な研究が行われています。昨年は、熊本県阿蘇郡西原村におけるボランティア活動を行った社会福祉学科の学部生より４件と福祉社会学研究科より１件の研究報告がありました。残念ながら今年は、社会福祉学部の学生の取り組みがありませんでしたので、福祉社会学研究科の大学院生より１件の研究報告となってしまいました。来年こそは、社会福祉学科の学生の皆さんが、自主研究助成に取り組まれることを心より願っています。

今年は、福祉社会学研究科の大学生より１件の研究報告が行われましたので、以下に自主研究助成論文を掲載します。（文：上田雪子）

討論型世論調査（Deliberative Poll）に対する一般的な認識と新聞動向の調査
―計量テキスト分析を用いて―

鹿児島国際大学福祉社会学研究科
博士前期課程１年　唐　玉

１．目　的

公共政策をめぐっては、人々が、十分な情報を持ち合わせず意見や態度を決めかねるという問題を克服するために企図されたものが、討論型世論調査である。こうした基準に基づいて実施される討論型世論調査は、政治の分野はもちろん、デザイン、社会学、教育学、開発学など他の社会参与の実現を目指す分野でも、リサーチと社会変革のための行動を集める有効なアプローチとなりうるであろう。

近年、人工知能（AI）が大きく進歩している。膨大な量の資料を扱う場合には、データの多様性、種類、分布などについての全体像を把握することが難しい。そのために、ここでは、コーディングルールの信頼性を維持し、労力を軽減し、データの質的側面を活かすことに、内容分析の一つ手法としてのテキスト型データの計量的分析を導入したいと思う。こうした分析の方法に活用できるようになれば、単に討論型世論調査の資料の分析というのみならず、社会福祉分野の探索的データ解析（EDA：Explanatory Data Analysis）にも発展しうるのではないだろうか。

いままで、新聞報道と社会参与意識に関しては、全国レベルを研究対象にした研究はあまりない。本稿では、このような背景の元に、荻原幸子（2014）の「『エネルギー・環境の選択肢に関する討論型世論調査』に関する新聞記事の動向」という論文の成果を基礎として、今まで（2010 年から 2019 年まで）の一社の全国紙の記事により、討論型世論調査について記事内容の分析を実施した。さらには、新聞報道と市民の社会参与意識の間に相関性が見られるという仮説で、計量テキスト分析のみに焦点を当てて試行した。

2．方　法

荻原幸子（2014）の研究に対して、本研究ではフリーソフトの KH Coder と『朝日新聞オンラインデータベース』を利用して、分析対象が一社の全国紙の記事により、見出しまたは本文に「討論型世論調査」を含む記事を抽出した。「討論型世論調査」に言及した『朝日新聞』記事のコーディング・分析を行った。次に検索された記事について、日程のみを記した記事などは調査対象外とした。「討論型世論調査」についてのことを伝えるのから内容を確認して、調査対象を選んだ。

3．結　果

本研究では、討論型世論調査についての新聞報道と市民の社会参与意識の間に相関性が見られたという仮説への計量テキスト分析を主とする。

まず、時系列によるリストアップされた特徴的な語を確認した。ほかの年に比べて 2012 年が圧倒的に多い討論型世論調査の手法と実施結果についての記事である。Jaccard 係数は２値変数間の関連を測定するための類似性測度の名称であり、単語間の共起関係を表すものとして広く使用されている。本研究では、記事から頻出語として登場数 70 以上の単語（全体の 7% 以上の記事に登場）、リンクを外部変数（各年度）の共起関係とし、分析を行った。荻原幸子（2014）は「時系列では、一部の新聞では 2012 年 10 月以降も、国政選挙や原発・エネルギー政策に関する政府の動きに関する記事において引き続き言及している状況も見出された。主に政権交代以降の政府の原発に関する政策動向を論じる際に、前政権の政策が「国民的議論による民意」を基盤としていた（少なくとも、基盤としようとしていた）ことを表す文脈で取り上げられている。」という新聞記事の変化と言われている。本研究で 2009 年から 2014 年まで討論型世論調査についての新聞記事の見出し内容の推移を示す変化と荻原幸子（2014）の討論型世論調査についての新聞の流れと同じである。

次に、コンコーダンス検索を操作した。コーディング結果のクロス集計によって、「意見聴取」記事群の割合は「市民参与」記事群の割合に比べて少ない。対応分析は因子分析や多次元尺度構成法のように、探索的データ分析技法として用いられる。時系列によるコーディング結果のクロス集計の対応分析によって、2010 年、2011 年、2017 年、および 2018 年に「市民参与」のコードに関連する傾向がある。さらに、2012 年と「意見聴取」の関連性が強くないと示している。

4．結　論

研究結果を全体に見ると、「市民参与」記事群は「意見聴取」記事群より全体に占める割合が多い。今回のテキスト分析対象も少なく、データとしては十分であるとは言えない。

また、新聞報道と市民の社会参与意識の間に相関関係が見られるのかどうか。本研究では実証的検討を試みる予想したが、市民の社会参与意識について引用資料は自由回答データではなく、計量テキスト分析ようにな操作を利用しなく、新聞報道と市民の社会参与意識の相関関係を確認できない。

今後の課題として、上述のような市民の社会参与意識についてテキスト分析資料を収集できれば、市民の社会参与意識と討論型世論調査の関連の探索が可能となるだろう。

計量テキスト分析を用いれば、質問紙調査の自由回答項目の分析が容易に行える。特に、「テキストマイニングとしてデータのグループ構造ないしカテゴリー構造が未知の場合には探索に役立つとされている」ことは（Afifi & Clark ,1996）が述べているとおりである。質問紙調査において計量テキスト分析を活用するために、主題によって自由回答項目の設問が広がりうる可能性がある。

2019年度演習論文テーマ

岩崎ゼミ

氏　　名	論文題目
明日山　貴浩	（共同執筆）ヒストリー・オブ・仮面ライダー ～彼らの足跡を辿って～
古宮　大樹	
小屋敷　実友	家族と子の関係について
坂元　宏熙	高齢者におけるアニマルセラピーについて
内大久保　浩介	ネット・ゲーム依存症における概要及び課題
漆間　將生	ＤＶのない社会に向けて
佐藤　慧	音楽が人に与える影響と音楽療法
寺田　幸乃	虫嫌いについて
中村　礼義	障害者スポーツの歴史と現状
松本　啓汰	プロ野球の歴史について
鮫島　隆静	じゃんけん必勝法
竹宮　智子	ネット社会の現状
鎌田　未結	児童虐待について

上田ゼミ

氏　　名	論文題目
大野　のどか	（共同執筆）大学生の睡眠が気分の変化に及ぼす影響
宮迫　佳代	
神野　志織	（共同執筆）大学生の精油の嗜好の違いによる気分の変化
安庭　あゆみ	

永池　麻衣	（共同執筆） 大学生の主観的睡眠に関する研究 ― 学年別・生活スタイル別の比較 ―
運乗　未来	
松尾　愛里紗	発達障害児へのアロマオイルを用いたハンドトリートメントの効果

大山ゼミ

氏　　名	論文題目
中井　亮	買い物難民について
久保　順平	喫煙について
塩屋　妃奈野	ユニバーサルツーリズム ～観光困難階層者にとっての旅行の在り方～
立山　颯大	認知症の理解と施策について
濵﨑　直人	障害者雇用の歴史
菅屋　達樹	障害者虐待について

岡田ゼミ

氏　　名	論文題目
中野　美里	児童虐待の現状について ―児童虐待の回復への道のり―
宮田　成貴	アルコール依存症の生活障害と回復支援
柏木　洋人	薬物依存者の回復の現状と課題
加藤　七海	精神障害者の地域支援の現状と課題
宮原　昂貴	アダルトチルドレンについて ～生きづらさを抱えた子どもたち
川野　祥正	触法行為を行った者の地域移行定着支援についての現状 ～警察官・保護司の語りから見えてくる現実と課題～

古賀ゼミ

氏　　名	論文題目
池川　絢音	障がいとコンプレックス
宇藤　いちず	学校現場における福祉教育の実践について
河内　杏菜	精神保健福祉関連施策と精神障害者の処遇

氏　　名	論文題目
竹下　綾乃	「ＬＧＢＴ」に対する取り組みと現状
柳崎　里帆	デートＤＶについて

中山ゼミ

氏　　名	論文題目
竹之内　優花	日韓における子供の貧困
上杉　裕太	子どもの貧困について
榮　星南	重複障害について
鶴留　由梨乃	障害がある方の家族について
牧　大貴	高齢者支援とソーシャルワークの展開過程
石川　健太	（共同執筆）　社会と福祉の関連性
川内野　樹	
武田　拓士	水泳による高齢者の予防効果 ―水泳と福祉の関係性―

松元ゼミ

氏　　名	論文題目
黒木　大雅	２つの教育実習で感じた相違点
森　厚貴	アトピー性皮膚炎について
神之田　陽	普通教育と特別支援教育の違いについて
菅　健輝	高等学校と特別支援学校の教育実習を通して
東原　里紗	特別支援学校卒業後の進路と就労の現状と課題について
富田　大城	普通教育と特別支援教育の違い

蓑毛ゼミ

氏　　名	論文題目
池田　陸哉	ムーブメント教育の効果に関する一考察
福薗　香歩	A氏からの聞き取りを通して ―障害児のきょうだいへの支援に関する一考察
鎌田　真代	自閉症児の発達と指導について

村上ゼミ

氏　　名	論文題目
河野　礼奈	（共同執筆）　青春映画グラフィティ ―恋愛映画を中心にして―
津川　莉穂	
橋本　直子	
紺屋　希	
軸丸　凛風	
白坂　真子	

山下ゼミ

氏　　名	論文題目
徳森　由里子	介護老人保健施設の目的とソーシャルワーカーの役割
松元　孝太	障害者支援施設での支援・活動 ―相談援助実習を通して―
上村　義歩	児童虐待の現状と課題
宇多　陽菜	診療報酬のしくみと入退院支援に関する一考察 ―医療ソーシャルワーカーの役割―

鹿児島国際大学社会福祉学会会則

[総　則]

第１条　本会は，鹿児島国際大学社会福祉学会と称し，本会の事務所を鹿児島国際大学福祉社会学部社会福祉学科に置く。

第２条　本会は，学術研究を推進し，会員相互の学問的交流を促進するとともに，地域社会の文化的発展に寄与することを目的とする。

第３条　本会は，前条の目的を達成するために次の事業を行う。
（ア）会報ならびに機関紙の編集・発行
（イ）研究会・講演会等の開催
（ウ）その他，本会の目的を達成するために必要と認められる事業

[組　織]

第４条　１．本会は，福祉社会学部社会福祉学科並びに大学院福祉社会学研究科に在籍する学生および両科の専任教員をもって会員とする。
２．準会員については，別に定める。

第５条　１．本会に次の機関を置く。
（１）会長
（２）総会
（３）運営委員会
（４）監査委員
２．会長は，社会福祉学科長とする。
３．運営委員(教員４名，学生８名以上)および監査委員(教員２名，学生２名)は，社会福祉学科で選出し，総会の承認を得るものとする。
４．前項の各位委員の任期は，教員については２年，学生委員については１年とする。ただし，再任は妨げないものとする。

[機　関]

第６条　１．会長は，本会を代表する。
２．会長は，年１回の定期総会を招集しなければならない。
３．会長は，運営委員会の議決に基づいて臨時総会を招集することができる。

第７条　総会は，本会の最高議決機関である。

第８条　１．運営委員会は，総会の承認により，学会の運営にあたる。
２．運営委員会は，委員長(教員)と副委員長(学生)の各１名を互選する。
（１）運営委員長は，運営委員会を代表し，定期およびに臨時に運営委員会を招集する。
（２）運営委員会は，そのもとに必要に応じて委員会を置くことができる。
３．運営委員会は，教員委員および学生委員のそれぞれ過半数の出席によって成立する。

４．運営委員会は，次の事項を審議決定しなければならない。
（１）年間事業計画
（２）予算案および決算書
（３）会則の改正ならびに諸規定承認・改廃
（４）その他必要な事項
５．運営委員会の議決は，出席した教員委員および学生委員のそれぞれの過半数の賛成で決する

[財　政]

第９条　教員会員の会費は，年額2,500円とし，年度初めに納入する。学生会員の会費は，年額2,500円とし，入学時に一括納入する。

第10条　１．本会の経費は，会費・補助金・寄付金でまかなう。
２．会計年度は，４月１日から翌年３月31日までとする。

第11条　会費の徴収，保管および支払いについては，大学事務局に委任するものとする。

第12条　運営委員会は，毎年会計年度終了後２ヶ月以内に決算を行い，監査委員の監査を受けたうえで総会に報告し，その承認を得なければならない。

[改廃手続]

第13条　本会則の改廃は，運営委員が発議し，総会の決議を経なければならない。

附則

１．この会則は，昭和57年４月１日から施行する。
２．この会則は，平成13年７月27日に改正し，施行する。
３．この会則は，平成15年７月４日に改正し，施行する。
４．この会則は，平成18年４月１日に改正し，施行する。
５．この会則は，平成20年４月１日に改正し，施行する。

2018(平成30)年度 鹿児島国際大学 社会福祉学会 収支決算報告

収入の部

項　　目		決　算	予　算
前年度繰越金		2,597,494	2,597,494
会　費	850,000	954,538	782,500
参加費	0		
雑収入	47,328		
寄付金	57,210		
収　入　計	954,538	3,552,032	3,379,994

支出の部

項　　目		決　算	予　算
「演習論文要旨集」発行費	99,900	1,360,701	300,000
会　議　費	7,248		0
自主研究助成費	103,585		300,000
新入生歓迎行事費	240,000		260,000
卒業パーティー開催費	260,000		280,000
「ゆうかり」発行費	499,500		350,000
講演会開催費	100,308		150,000
事　務　費	0		10,000
通　信　費	2,860		10,000
特別事業費	47,300		0
学生アルバイト料	0		0
会　費	0		50,000
支　出　計	1,360,701		1,710,000
当年度末残高		2,191,331	

ゆうかり編集室便り

（写真後列） 茶屋道拓哉　　村上光朗　　（写真） 有園菜央さん　草野春香さん
（写真前列） 一氏未奈さん　　佐々木晶さん

◇今回も昨年に続き編集を担当しました。なかなか編集会議がもてず苦労しました。何しろ学生の皆さんは、本当に忙しい。上の写真がそのことを物語っています。一堂に会する機会をもつのが難しく、集合写真も分けて撮りました（スカイプなどでネット編集会議をする時代なのかもしれませんね）。けれども学生編集委員の皆さんには執筆までしていただき、本当に感謝しています。来年以降は、本来の編集の仕事（企画・デザインから原稿依頼・まとめ、編集・校正・誌面づくり）にもっと精力を注いでもらえるようになるといいですね。そうすれば、『ゆうかり』は飛躍的に面白くなるはずです。来年度は、新しい編集長のもとでさらなる発展を遂げていってください。大いに期待しています。**（村上光朗）**

◇大学院生の時に研究助成をいただき、この『ゆうかり』に成果の一部を載せた記憶があります。社会福祉学会の部屋の中で、そのバックナンバーが出てこないことを祈りつつ編集メンバーと話をしていました。今年は主に学会の講演会を担当しました。学生さんたちの頑張りに感謝！**（茶屋道拓哉）**

◇編集委員のメンバーとして『ゆうかり』の記事を書くのも２回目となりました。前回より迷走した気がします。けれど楽しかったです。ありがとうございました。**（有園菜央）**

◇昨年に引き続き本誌の編集を担当させていただきました。なかなか筆が進まず出来上がりが遅くなってしまいましたが、記事を書き終えたときはえもいわれぬ達成感がありました。**（佐々木晶）**

◇今回この『ゆうかり』の編集に初めて関わってみて、記事を書くのがこんなにしんどいものなのかと感じました。どのように書いたら記事を読んでもらえるかとか自分なりに考えてみましたが、とても難しくて文を考えては消しての繰り返しでした。ですが、このような経験はなかなか無い事だと思うのでとても良い経験だったなと思います。**（一氏未奈）**

◇１年の新ゼミで、自分から希望した社会福祉学会の委員ですが、私に出来るか不安でした。しかし、いざ書いてみると楽しい気持ちが強かったので驚きました。良い経験になりました。ありがとうございました。**（草野春香）**

本誌ロゴ、ポポラスイラストに関しては、村上絢音さん、村上瑶子さんからのご協力をいただきました。本当にありがとうございました。

編集後記

昨年度、本誌『ゆうかり第 18 号』に登場してくれた「大学猫」（くつした猫）は、いまも元気で五号館周辺を毎日散歩しています。どこで餌を調達してくるのか、そして寒い冬をどのようにして過ごしているのか、いまだ謎の部分が多いのですが、他の野良猫軍団ともどもたくましく生きています。

本学には、野良猫もさることながら、いまだに野生の領域があちこちに残されています。何しろ「ユーカリ会館」の裏手には、人の手が入っていない山林がそっくりそのまま現存しているのですから。春になれば学生駐車場からの登り坂には、黄色い実をつける野生の木苺が繁茂します。私は散歩の途中で木苺の粒にときどき手を伸ばして頬張るのですが、びっくりするほど美味です。また、鹿児島経済大学時代には、野兎や雉、アナグマ（ニホンアナグマ）といった野生動物がキャンパス内でもしばしば見受けられたものです。

ひるがえって、私たち自身の「野性の領域」はどうでしょうか？　コンプライアンスを標榜する「法化社会」のなかで、何かすべて社会に馴化させられてしまい、私たちの野性は死に絶えつつあるように見えます。人目も憚らず大きな声で叫んだり滂沱するような体験は、記憶を辿ってみても遥か彼方に霞んでいるだけです。

文明の進化という面からすると、それはそれで仕方のないことだし、また良いことなのでしょう。けれども、私たちの想像力だけは、いつまでも野性の荒々しさや自然さを失いたくないものです。「みんながそうしているから仕方ない」「それが決まりだから仕方ない」のではなく、ひとり孤独の中で、馴化させない野性の爪を研ぐこと。それはやはり、「なぜ！？」という鋭い問いかけを、常に心の奥底で発することに尽きると思います。私たちが当たり前として受け入れている物事は、実はどれももともとは当たり前でもなんでもなかったのですから（当たり前を鵜呑みにしてしまうとチコちゃんにキツク叱られますね）。

『ゆうかり』も、そうした「なぜ！？」にこだわることが一番大切であると感じているところです。鋭い「なぜ！？」を前面に打ち出した誌面作りを、学生のみなさんの若い想像力で実現してもらいたいものだと、私はひそかに期待しております。

最後に、2019 年度の社会福祉学会には、下記のとおり、沢山の運営委員の皆さんが参加してくださいました。本当にありがとうございました。ここにポポラスともども改めて感謝する次第です。多謝　　(M)

2019(令和元)年度　鹿児島国際大学社会福祉学会　運営委員

教員運営委員　村上光朗(運営委員長)　古賀政文　上田雪子　茶屋道拓哉

学生運営委員

１年：草野春香　一氏未奈　田尻彩華　大里実希　本園叶美　神﨑未有　増山陸　三谷茂将
竹原由乃　牧原拓実　牧優花　高橋あい　菅原優菜　溝口昌歩　大村隆就　津崎真希
山口凪　外園翔一朗　小田諒真

２年：佐々木晶　有園菜央　元莉奈　堂地舞人　池田健真　神田雄飛

３年：下田平啓嗣(運営副委員長)　西健史郎　岩元悠太朗　東條悟武　出原龍樹　大重朱音
山本春来　上田悠里香　多田隈完　大井一矢　山村ひかり　椎原彩華　藤貫愛加

４年：宇藤いちず

会計監査委員　(教員)山下利恵子　有村玲香　(学生)屋宮知竜　泊由梨佳

鹿児島国際大学社会福祉学会誌

ゆうがり 第19号

発行　2020年３月19日

編集　鹿児島国際大学社会福祉学会

住所　〒891-0197 鹿児島市坂之上８-34-１
Tel 099(261)3211(代)

印刷・製本　有限会社 広和印刷
Tel 099(222)3522

ゆうかり 第19号　2020年 3 月19日　鹿児島国際大学社会福祉学会編集